
IS インフィニット・ストラトス ー武装を持たないISと気に入らない目付きー

マイペース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ―武装を持たないISと気に入らない目付き―

【Nコード】

N9822S

【作者名】

マイペース

【あらすじ】

皆さんは思った事があるはずだ、原作の織斑君の目を見て思ったはずだ。

「これ不良だろ？」と、皆は思わなかっただろうが、俺は思った。だったら俺は、もしも織斑一夏が、ぶち不良だったら、どうなるのかを書いてみたかったから、私は書いてみようと思っただけの、自己満足小説です。

こんなはずじゃ無かったのになぁ・・・・・・・・あとコロシアムガーレットなり

俺には夢がある。

あの人のように格好よく、あの人のように凛々しく、あの人のように強く成りたい。

それが俺の夢だった。

だから、俺は俗に言う『文武両道』とやらを目指していた。

けど、昔誘拐されたことがある。しかもこの誘拐は被害者が俺だけならば良いものを、あの人の将来に泥を塗ってしまった。

それから俺は変わった。

あの人に頼らず、強請らず、そして何より心配をかけさせないために・・・・・・・・

「俺・・・・・・・・強くなれたかな・・・・・・・・千冬姉・・・・・・・・」

ある街のある路地裏の一角、普通の学生なら近寄りもしない所である。

ただここは良いところだ。

なんたつて――――

「・・・うう・・・」

「・・・くそっ・・・イテエ・・・」

「・・・オレらが・・・悪かったて・・・」

―――なんたつて、外部にはれずに喧嘩が出来るんだからよ――

その地面には唸りながら悶えている、一般的に不良と呼ばれている男が五人ほど、満身創痍で突っ伏していた。

そして、その不良どもを椅子代わりに座りながら、白い筒見たいな物を口に加えている青年、それが――――

「てか、今日から学校じゃん・・・まだ時間は間に合うかな？てか、遅刻したら、千冬姉に怒られるかな？」

「……………今作の主人公、〃 織斑 一夏〃である。

「約一名欠けていますが、全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー。」

そこは俗に言うISS学園の中の教室、一年一組の教室である。

そしてこの教室は今日から授業が開始される訳なのだが、まあ、学校が始まる時の恒例かね、自己紹介が有るのだが、約一名が居ないのであるが、そんな事で授業の一環である自己紹介が無くなるわけも無く。

「では、自己紹介をしてもらいます、出席番号順にお願いしますねー」

そう行ったのは、このクラスの副担任、〃 山田真耶〃である。

そして順々に自己紹介が終わっていったのだが、ここでストップがかかった。

「……さん、ありがとうございます、では、次に織斑一夏くん・・・そういえば居ないんでしたね・・・では、次の「そうは、問屋がおろさんぜ先生よお！！！！！！！！！！」」

急に来た来訪者に山田真耶もびっくりしている、クラスの殆どもびっくりしているのだから。

「すみません先生、学校に来る最中に、少しばかり有りまして・・・それで遅れてしまいました・・・」

「はあ、それは良いのですが、織斑君・・・その、口にくわえているのは、煙草ですか？それならば、先生として、相応の態度を取らせて貰いますが・・・」

山田先生はさっきまでのまったくとした空気から、すっ、と刃物のような鋭い空気に周りを染め上げた。

クラスの女子達はそんな空気に触れた事さえ無いのだから、冷や汗が出ているが、そんな空気をびくともしない一夏は、口にくわえて

る物を手にとって、山田に見せながら言う。

「あ、これですか、これはココアシガーレットですよ?」

「「「「「.....へえ?」「「「「」

さっきまでの空気が音速で去っていき、一瞬で違う空気になった。

「いやゝ、これ口にくわえてないと気がすまないんですよ!」

「は、はあ.....」

一夏の発言に呆気とられてる山田を見て――

「そう言えば、今って自己紹介やってましたよね? 俺の番ってもう過ぎちゃいましたか?」

頭を掻きながら申し訳なさそうに、言う一夏に――

「い、いえ、ちょうど織斑君の番ですよ?」

こちら申し訳なさそうに言う山田先生。

「ならちよつど良い、やらせて貰います。」

そついいながら一夏は黒板の前にある教壇に腕をつきながらこついた。

「俺の名前は織斑一夏だ、好きな物は、見てのとおりココアシガレット、将来の夢はまだ無いが、目標はある。それは――――」

「この先生、織斑千冬を越えること」「寝言は寝て言え!」「ヘヴン!――!」

目標を言おうとした一夏君を沈没させたのは、出席簿と、織斑一夏の姉、織斑千冬であった。

こんなはずじゃ無かったのになぁ〜・・・あとココマシガーレットなり（後書

一夏君のステゴロは、ラウラよりちょい上位です。

けど、一般不良から見れば無双ですねwww

――諸君、私は統率するのが好きだ――いやいや、あんたは人間かね？（前書き

とりあえず、投降します・・・投稿します・・・

いやあ、皆さんは、シャルロット党とか、ブラックラビッツ党とかかと思いますが、自分は断然・・・ブラックラビッツ党ですはい・・・

けど、個人的には千冬さん、好きですけどね、ネットに千冬さんがスカート履いてる画像を見たときから惚れますね？

だって可愛いんだもん？

感想、意見などは勉強に成るのでどんどん下さい。

では、MY PACE WORLD 始まるよ？

――諸君、私は統率するのが好きだ――いやいや、あんたは人間かね？

「流石に弟をへヴンするのは余りにも残酷すぎでは有りませんか？」

俺の問い掛けに千冬姉は――

「ふん、調子にのっている生徒に制裁を加えたまでだ・・・」

千冬姉は出席簿で肩で叩きながら呆れた目付きでこっちを見ている。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつな」

久しぶりに千冬姉の声を怒号以外に聞いたような気がするんだけど
な・・・。

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

弱々しい声は変わらないが、この女性（副担任らしい・・・しらんけど・・・）

だが、その視線には尊敬や憧れを通り越して居るような・・・

・・・ハッ！？

ワカタゾワトソン君！！！！

「千冬姉・・・男性が近づかないから・・・同性に走るのは「貴様は二度死ね！！！！！」なんとおお！！！！！」

俺が言おうとした時に、邪魔しやがって、いま俺の頭上には振りかぶられた出席簿とそれを押さえて頑張っている俺のココアシガーレットである。

ココアシガーレットって意外と堅いんだな・・・

ぼきっ！！！！

「あ、折れた！！！！」「二重の極み！！！！」「ヘヴン！！！！」

・・・出席簿って痛い・・・皆も学校に行ったら友達に試せよ・・・

「では、気を取り直して、諸君、私が織斑千冬だ。君たちには一年で使い物になるまで育てるのが仕事だ」

ふうん、千冬姉って数年前からこんなことしてたんだ・・・

「私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。私の仕事は若干十五才の十六才に鍛えぬくことだ。逆らっても良いが私の言うことは聞け、良いな」

なんだか、戦争が大好きな大佐殿の演説みたいだな。

時が時なら、千冬姉は国を背負ってただろうな・・・

「キャ　　！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さんのためなら死ねます！」

「イエス・ユア・ハインス！」

・・・何これ怖い？

女子校では同性に走りだすような奴が居るのは都市伝説見たいなんで知ってたけど、本当にあるとは……いやはや怖い怖い……

まあ、実際俺と喧嘩した不良を統率してパシリにしたり、パシリにしたり、パシリにしたり……成れの果てには、

「「「姐御と兄貴、ご無沙汰してます!!!!!!」」」

とか言われながら中学校に行った記憶がある……

「あれ？織斑君って……まさかあの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、それが関係して男なのにIS使えるのか？」

「良いなあ、変わって欲しいなあ!!」

「………まただよ……」

皆、織斑一夏をみずに、織斑千冬の弟の織斑一夏を見やがってやがる……

「織斑、落ち着け……それに貴様等も少しは静かに出来ないのか!!」

千冬姉が最初は呟くように俺に言い、忠告の方は威厳バリバリの声量で言い放った。

「……………すみません、千冬ね……………織斑先生……………」

なんだか名前を言ったら殺されそうだったので、先生として呼んだ。そこでチャイムが鳴った。

「おまえは昔からこうされるのが嫌いだったからな……………さあ、SHRは終わりだ。これから基礎知識を半月で覚えもらう。その後自習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。」

クラスの女子の大半が千冬姉に尊敬の眼差しを送っている。

やれやれ、昔から思ってたはいたが女子は不良よか怖いな……………統率すると手に付けられないからな……………」

「いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

本当にウチの姉は人間かね？何て言うか、上から物を言うのが上手いと言うか、人の上に立つのが上手いと言うか……………これだけの人心掌握術だけでも、異常、なのに、腕の方も、異常、だから怖いんだよね。

「……………イエス・ユア・ハインス!!!!!!」

- ・
 - ・
 - ・なんと無駄に洗練された、無駄の無い、無駄な発言だろう・

――諸君、私は統率するのが好きだ――いやいや、あんたは人間かね？（後書き

なんだか、千冬さんがめだかボックスの世界に行ったら、即13組に入るだろうな・・・

てか、めだかボックスのめだかとマジ恋の百代がかぶるんだよねえ？

では、待ったね？

幼なじみとランデブーってか？ 努力？したから良いんだよ

「ええい！！！！貴様は見ない間にそんなに不良見たく為つたのだ！！！！！！」

「こつちにも色々有ったんだよ！！！！！！」

今起こっている事を話すぜ……

目の前に可愛い顔をした女の子、幼なじみがいる。

女の子なんてちゃんもんじゃないやねえ……そこには般若のような形相をしてる鬼が木刀を型に填まった振り方をしている幼なじみ、篠ノ之箒が居る。考え事をしてる暇が有るのか一夏よ！！！！！！」

ぶん！！！！

ヒョイと……

「当たったら痛いだろうが！！！！」

「ええい、貴様なら当たらないだろうが！！！！！！」

そう激昂すると箒は某無双ゲーのように木刀を振り回してきた。

「・・・不幸だ・・・」

事の発端はSHRが終わった時、後ろから声をかけられて振り向いてみると、昔と変わらない「箒」がいて、廊下と呼ばれたのは良いのだが沈黙状態が続き、耐え切れなくなり話題を提示した。

「そういや、箒、去年、剣道全国大会で優勝したよな？おめでとう」

「・・・なんでそんなこと知ってるんだ」

「いや、千冬姉に言われて新聞読むのが習慣に為ってたからな？」

「な、なんだと・・・」

箒は驚いたような顔に為っていた。

「・・・けど、あれ？」

確かあの新聞は家じゃなくて・・・

「・・・あ！思い出した！」

「ど、どうしたのだ・・・いきなり大きな声を出して」

「いやあ、その新聞呼んだのって何処だったか忘れててな、今思い出したんだ・・・いやあ懐かしいな・・・」

「ほ、ほう、してどこでよんだのだ？」

箒は気になるのか目を少しだけ輝かせてこっちを見ている。

まあ、自分の事だしな、気になるのも仕方がないよなー――

「いやあ、本当に懐かしいよ・・・喧嘩し終わって帰る途中に拾ったんだった」

「・・・はっ？」

箒はあきれたような顔をしている。

「あの時は本当にヤバかったもんね・・・だって15 VS 1で勝ったもんね・・・」

「・・・い、一夏よ・・・き、貴様は・・・」

プルプルと震えてるが箒はどうしたんだ？

・・・あ、あれ？何でさっきまで持って無かったのに木刀なんか持ってるのかなあ？

「あ、あのー、箒さん？」

恐る恐る箒に伺って見たものの――

「貴様と言つ奴は！！！！！！！！！！」

ゝ触らぬ神に祟り無しゝとは昔の人はよく言つたもんだよ？

それで、冒頭まで戻るかな？

え？剣劇は終了したよ？

なぜかって、それは始業のチャイムが鳴ったから箒から――

「とにかく後で説教だからな！！！！」らしい・・・鬱だよ・・・

「
であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の
認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法に
よって罰せられ
」

どうも、織斑一夏です。

今現在授業でやってるのはISの動かし方ではなく、取り扱い説明
みたいな物である。

正直退屈だなあ・・・・・・・・

自慢では無いが俺は勉強は出来る方だから自習と予習だけでこと足
りたからな、授業なんて聞いてなかったから（だから、中学でも寝
てて不良って言われてただけだな・・・・）。

今の授業もこの学園に来る前に参考書を「暗記」と「理解」は終わ
ってるから聞く意味なんて無いんだよなあ・・・・
机の上にある教科書も読んでみたが、参考書の用語のパズルだった

り、応用だったりしてるので真面目に授業を受けなくても、テストでは80点台は固いと思うぞ？

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

山田先生が俺に問い掛けてきた。

確かに今の俺の姿勢は机に突っ伏している状態だから、もしかしたら「解らない」のかな、てな推測が立つても無理はないだろうよ？

「いえ、無問題です。」

俺は顔を上げて山田先生の目を見ながら言った。

「で、ですが、顔を伏せていたので解らないのかと・・・」

「山田先生、あいつ・・・織斑はそういうのは大丈夫ですから無視しても大丈夫ですよ・・・」

おどおどし始める山田先生と「またか・・・」みたいな目を送ってくる千冬姉。

「織斑は私が昔に、少しだけ、勉強のやり方を教えてやったからな、その所為で、暗記」と、理解に長けているからな」

「あ、暗記は解りますけど、理解って、理解するの、理解でいいんですか？」

どや顔をしている千冬姉と頭にクエスションマークを作っている山田先生。

確かに昔に千冬姉に、少しだけ、というなの、地獄の勉強会の所為でそこら辺スペックは上がったのだが……

「織斑先生よ、小学生に向かって罵声と暴力を訴えかけながら、石畳を抱かせつつ、部屋の酸素を4分の1にして1ヶ月する勉強会が、少しだけ」と言うのなら、俺は神だろうと殺してやる……」

あの時は死ぬかと思った……そういえばあの時からココアシガーレット食いだめたな。

ストレスの捌け口がまさかココアシガーレットとはな……

「え、織斑先生、そ、そんな事してたんですか!？」

PART1を聞いて山田先生はビックリしているようだ。

クラスの女子も皆動揺してる……なぜなら……

「む、そうだがなにか問題でもあったか？」

その勉強法が、当たり前だと思っっているのだから

タカビーとは誰の事ですか？ 姿見をみるオルコツ党（前書き）

連日投稿なう！

では今から私はジャンプとめだかボックスの単行本を買いにでも行ってきますかい（〃・・）／

感想とか意見等も気軽に書いていってください（・・・）

では、MY PACE WORLD 始まりかな？

タカビーとは誰の事ですか？ 姿見をみるオルコツ党

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

二時間目の休み時間、俺は授業中に吸え・・・食べれなかったココアシガレットをくわえて休み時間を謳歌しようとしていたら誰かが話し掛けてきた。

話し掛けてきた相手は日本人ぽくない肌の白さと、目の色がブルーだから多分英国辺りから来た生徒だろう。

そして彼女から感じる高貴なオーラを見るかぎり彼女も、今時の女子なんだろう。

今の世の中は、IS[〃]が使える、それが国家の軍事力になる、だからIS操縦者はえらい、そしてIS操縦者は俺を除いて女しか居ない。

だから世の中の女性は男を奴隷か労働力としか見ていない。実際街中ですれ違った女の子にパシられてる男を見るなんてごろにある（まあ、その場合俺は睨み付けて終わるんだけど・・・）。

「訊いてます？お返事は？」

「ハイハイ聞いてますよ、で何？」

ココアシガーレットをくわえてるときに来やがって……

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話し掛けられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「残念ながら初対面の奴にそんな態度でエンカウトをしようとしてる奴にしてやれる態度なんか持ち合わせてないんでな」

全く、初対面の奴に良い印象を与えようと思わないのかな？

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

セシリアやね、多分自己紹介の時には千冬姉にヘブンされてたから氣失ってたからな

けど……

「それ言うなら俺も入試全教科満点だし、日本の〴〵暫定〴〵代表生だぞ？」

「な、入試主席なのは私だと聞きましたのに、それに、暫定、代表生で事も聞いてませんわよ！」

「あゝ、あれじゃね？」女子だけって、オチじゃね？」

「つ、つまり、私だけでは無いと・・・で、では、わたくしは入試で唯一教官を倒しましたがあなたはどうですか？！」

「なんだか声のボリウムがでかくなってきたなあ、周りが騒つき始めたぞ？」

「入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に在りませんわ」

「あれなら・・・負けたな・・・」

「ほら見なさいな！やはりわたくしの方があなたよか上に居ますのよ！」

オルコットが胸を張りながらこっちを見下ろしている。

「ただあの時は・・・」

「まあ、仕方ないんじゃない？あの時は、専用機、貰って日も浅かったし」

「そついいながら俺は腕に着いている待機中の俺の、IS、を見せる。」

「おや、あなたも専用機持ちでしたの？ならもつと酷いのはありません？専用機持ちが配給用ISを使う教官ごときに負けるなんて同じ専用機持ちとして恥ずかしいですわ」

「いや、あの時の試験官って・・・ってあれ？誰だったかな・・・確か自分で、ドイツ、代表って言ってたけどな・・・」

「！！！！あ、あなた、代表生と戦いましたの！？」

「落ち着け、糖分が足りないのか？」

ココアシガレットをちらつかせてみる。

「こ、これが落ち着いていられ」

キンコーンカーンコーン。

おっと三時間目の始業のチャイムだ。

「っ・・・また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

そのままオルコットは自席に戻っていった。

おれ？さっきからずっと席に座りっぱだよ。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

さつきまでの授業とは違い、山田先生ではなく千冬姉が教壇に立っている。

山田先生まで教室の隅でノート取ってるし……

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への主席……。まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今のじてんでたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

まあ、簡単に言うと、クラスの代表、てな訳だな……。何だか嫌な予感がしてきたな……

「はいっ。織斑くんを推薦します!」

……。ほら来たよ……

「私もそれが良いと思います」

クラスの女子が次々にそうっていく。

まあ、世界で唯一ISを使える男がクラス代表だったならネームバリューがあるわな……

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「……不幸だ……」

はあ、この手のはあらがわず、流れに身を任せてればいうんだよ。

「待つてください！納得が行きませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのはオルコットだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

なんだか、本当にあれだな……ム力つくな……

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！私はこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

・・・・・・折ろう・・・
「いいですか！？クラス代表「ザクザクザクツザクツザクツツ」
！！！！」

オルコットは驚いている。

それもそのはず、なんとってオルコットの机には十数本のココアシ
ガーレットが机に、刺さっているんだから、そして俺はオルコット
の席に近づき、

ドンッ！！

机を踵落としてたたき割り。

「テメエ、自分が気に入らないからってこの国バカにしてんじゃね
えぞコラ？」

「なっ！？」

「テメエの国もいつまでも、貴族、なんつうもんに捕われてるだろ
うが英国風情が。」

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「これは侮辱じゃない、紛れもない現実だよ、戦争処女^{リアル}。そんな言
葉は薬莢の匂いを染み付かせて、ハンマー音を覚えてから言っただ
な？」

「決闘ですわ！」

女性**は絶対無敵最強**なんだよっ！ 底辺を知らないVIP共がつ！
（前書き）

自分ISの世界の**女性**が強いのだろ？の思想が嫌いなので書いてみました。

それよか、今週号のジャンプの球磨川がかっこよすぎる（〃・・）
/

では、MY PACE WORLD はじめたいです？

女性は絶対無敵最強なんだよっ！ 底辺を知らないVIP共がっ！

パンツと机を叩くオルコット。

「ああ、別に良いぜえ、だけど殺さない程度^での真剣勝負ならデ
メエよか場数は踏んでるぜ？」

「そう？流石は極東の猿さんですわね。何にせよちようど良いです
わ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの
実力を示すまたとない機械ですわね！」

「どうでも良いがハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「ちげえー、俺がハンデ付けるんだよ？どうする、右手しか使わな
くするか？目隠しするか？」

その位は普通に有ったからな……強くなろうと思ってたら国ま
で出たからな……

————クスクスッ！

クラスの女子達がクスクス笑いから段々と爆笑に為っていった

「お、織斑くん、それ本気でいつてるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

みんなが本気で笑っている。

千冬姉は呆れている、まだまだ、人間、として、思考、出来てない
使用の無い女子（兵士）にたいして・・・仕方ない。

「すまんがその娘」

「え？私のこと？・・・クスッ」

俺はすぐそこにいた女子に話掛けた。

その子もさっきの話題で笑っていた。

「君は、男が強いと思うか？それとも女が強いと思うか？」

「そんなの当たり前前に女性が強いに決まってるじゃん！そんなの当たり前じゃん！」

女の子は当たり前のようにしらっと返事をした。

「では、質問を変えるよ、君は俺より強いのか？」

「それは織斑くんはISを使えるかもだけど、やっぱり女性の私の方がつよ「ザクッザクッザクッザクッ」！！！！」

俺はさっきオルコットにやったように、机に「モノ」を突き刺した。

だが、さっきと同じココアシガーレットではなく、「コンパス」やら「三角定規」やら「彫刻刀」やら「シャーペン」やらと、文房具が刺さっていた。

「君は俺、よか強いのだろ？だったら俺のやる攻撃なんか気に掛からない些細なものだろ？」

「！！！！ば、バカじゃないの！？さっきのは現実的じゃなくてISを使ったならの話でーーーー」

「だったら、ISを使えたなら、俺に勝てるのか？」

「そんなの当たり前じゃない！」

この女の子は解ってないなあ。

「じゃあ、話題を変えよう。君は街中で会った男をパシリに使った事があるか？」

「そんなのあるに決まってるじゃない？」

「ならそのパシリに使った男が不良でもしも、仕返しとして仲間を呼んであんたを路地裏に連れていったら・・・貴様はそうなってもまだそんな事言えるのか？」

「そ、そんなことあるわけが「あるから言ってるんだよ」なっ!？」

「大体はそうなる前に女の子が助けを呼んで不良が逃げたりするが、そうなった女の子は心に多少なりとも傷を作っているんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

女の子は俺の話を真剣に聞いている

クラスの女子も同じように聞いている。

「つまりだ、おまえら、女性^が強いんじゃない、テメエ等を包んでるIS（鳥かご）が強いだけなんだよ、そこを勘違いしちゃいけ

ねえんだよ……」

「……ごめん……織斑くんに言われるまで気付かなかったよ……」

女の子はこれまでパシリに使った男の顔を思い出しつつ申し訳なさそうに言った。

「解ってくれたなら良いよ……おまえらも解ってくれ……」

クラスの女子達も皆が同じように顔を下にして俯いている。

「それとオルコット、ハンドの件だが決まったよ、俺はお前との喧嘩では……ブーストを使わないよ……」

「……！そんな事をしては飛べないのでなくて！？」

流石に、軽すぎ、たかなあ？

千冬姉に、特訓、とか言われてドイツ軍の訓練をさせられたり、ドイツ軍の方々と喧嘩させられたからなあ。

そのときは目隠しさせられたり、ナイフに向かって木刀で行かされたり、銃相手に素手で挑まされたりと……それよかまだマシだよ。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。そして織斑はブーストの使用を禁止する。それでは授業を始める。・・・・・・それと織斑が言った言葉は本当の事だ。お前等も心にしまっておけ。」

そう言い千冬姉は微妙な空気な状態で授業を始めた。

あ、シャーペンとかさしっぱだった！

女性は絶対無敵最強なんだよっ！ 底辺を知らないVIP共がっ！ (後書き

やってしまった感が否めない話でした。

感想などお待ちしますよ？

踊りなさい、わたくしが奏でる円舞曲で！ 鎮魂歌の間違いだろ？ (前書き

すいませんでした。

連日投稿をストップさせてしまいましたねー

多分、今日中には後もう一話上げられるかな？

では、感想などお待ちしてますよ？

では、 M Y P A C E W O R L D 始業しますよ？

踊りなさい、わたくしが奏でる円舞曲で！ 鎮魂歌の間違いだろ？

そしてあれから一週間がたった月曜日。

え？その一週間何があつた？

箒と部屋が同じで殺されかけたり、箒に剣道所に連れて行かれて木刀VS素手をやらされたり、千冬姉に「負けたら・・・わかつているな？」イエス・ユア・ハインス！とそんだけだったのでゾンビ・クリムゾンさせてもらいました。「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

大切なことだからって三度もよばんでも・・・

第三アリーナ・Aピットに駆け足できたのはおなじみ副担任の山田先生である。

「山田先生、落ち着いて落ち着いて、ココアシガーレットあげますから・・・」

「ハアハア・・・ありがとございます」

山田先生は呼吸を正して俺が上げたココアシガーレット食べていて

いる。

「ポリポリ・・・あ、これいけるかも？」

「そうですね山田先生、これうまいですね！」

俺は山田先生の手を取りつつ言った。

「女性の体を勝手に触るものではないぞ、馬鹿者」

後ろから掛けられた声と風きり音、多分風きり音は出席簿の音だろう、だが甘いぞ千冬姉！

俺は上から来る出席簿をココアシガーレットで受け止める。

「甘いぞ千冬姉！そんな攻撃じゃ「織斑先生と呼べ。ゴスンっ！！」
「へヴン！！」

は、謀ったな・・・慢心してる最中に延髄殴るって・・・

「学習しろ。さもなくばまたドイツ軍の演習に参加させるぞ？」
「うっ、ドイツでもそんなだったから結婚出来ないんだよ？」

俺は背中を擦りながら皮肉気味に言ってみた。

「ふん。馬鹿な弟にかける手間隙がなくなれば、見合いでも結婚でめすぐできるさ」

「そ、そそれですねっ！織斑くん、用意は出来ましたか？」

山田は言いにくそうな顔で俺に行って来た。

「大丈夫です、いつでもいけます。それに俺は二人を待ってたんですから」

「なら心配ないな織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。」

「解りましたよ……」

「ちなみに、もしもあんな戦争処女バージンの小娘なんかに負けてみる？……わかってるな？」

イエス・ユア・ハynes!!!!!!

「では行ってまいります！……白式！」

右手首についているブレスレットをつかみISを展開する。

ピカッ！

一瞬の光が生じ、光が治まったところには一次移行まで終了した俺のIS、白式が展開されていた。

（やっぱり、IS付けると五感が冴えるなあ）

解像度を一気にあげたかのようなクリアな感覚が視界を中心にひろがっていく。

（不良との喧嘩の時にハイパーセンサーだけ使ったら一発も食らわずに終了だろうな・・・）

戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備あり。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「心配してくれてるんだな、千冬姉・・・」

「ふん、馬鹿者。不良に為ったとはいえ私が育てたのだ、心配などせん」

「これまた重圧をかけてくれるねえ？もしも勝てたら久しぶりにポトフでも帰って作るよ？」

「一夏のポトフは旨いからな、楽しみにしとくぞ？」

千冬姉、ヨダレが垂れてるよ？ちなみに作るんだったらポトフよか肉じゃがの方が旨かったりするんだな？

「ああ、・・・箸」

「な、なんだ？」

さつきからそわそわしている箸に一言――

「行つて来る。」

「あ・・・ああ。勝つてこい。」

なんだかこういうの良いな。そう思いながら俺はピット・ゲートに進む。

・・・てか、あれ？

「千冬姉？」

「なんだ？早く行って早く帰ってきてポトフを作れ・・・じゅる」

千冬姉はまだヨダレを少し垂らしていた。

「ブースト無しでどうやって飛ぶの？」

「そんなもの簡単だろ・・・床を殴れば簡単な事だろう」

ああ、成る程ね、つまりスクライドのカズマみたいに地面を殴れと、
しゃあ無いな・・・

「じゃあ皆さん何かにしがみ付いてください。」

そういうと筈、千冬姉、山田先生は散開し各自壁やら支柱にしがみ付いた。

「よし、じゃあやりますか・・・衝撃のファーストブリットー！！」

叫びつつ床を殴り付けるとその勢いで外へ飛び出た。

「あら、逃げずに来ましたのね」

俺は地面に着地すると腰に手を当てたポーズが様になっているセシリアがいた。

「最後のチャンスをおげますわ」

右手の人差し指を俺に向けている。左手にはゆうに二メートルを越す長大な銃器 六七口径特殊レーザーライフル《スターライトmkⅡ》は銃口は下がったままだ。

「そんなもんあるのかい？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認

なんだよ、戦う気満々じゃん・・・

「残念ながら、意地があるんでね、男の子には・・・」

「そう？残念ですわ。それなら」

警告！敵IS射撃態勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

オルコットは銃口をこちらに向けてトリガーを引いた。

・
トリガーを引くところまで見えるとは恐るべしハイパーセンサー・

キュインッ！

独特の音を出しながら出てきたビームを俺は……

「————邪魔だ————」

右ストレートで殴り発散させた。

そんな機体がありますの！？ 少し折れて来い、それから飯でも食え！

（前

なんとか間に合った！！！！

いやあ、すいません、BOOK・OFFに行ってエア・ギア見てたら時間が……

まあ、今回の話で一夏くんのISの能力とタイトルの意味がわかります。

まだ作者として未熟者ですので、ご指摘、感想がありましたら気軽に書いてみてください。

では、MY PACE WORLD 開幕です。

そんな機体がありますの！？　少し折れて来い、それから飯でも食え！

オルコットは俺がビームをただの「右ストレート」でかき消した事に驚愕しているようで口をぽかーんと開いている。

「どうしたオルコット、鳩が８８ミリ《アハトアハト》食らったみたい顔してるぜ？」

「あ、あなたのＩＳに常識はありまして！？わたくしのビームを殴ってかき消すなんて聞いたことも有りませんわ！！」

やっぱり、それが・・・

「それなら、戦ってたら解るさ・・・こいよ。」

俺は左手で腰をつき、右手で手招きをし、挑発を試みる。

「くっ、そんなにボロボロにまけたいのですね、ならば踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

セシリアは持っている《スターライトmk》と周りに飛んでいる自立型ビーム兵器（ややこしいなあ）で、多角的な攻撃を展開してき

「その代わりに武装用に空いた空き要領スロットにある能力が付加できたんだ。」

そう、実はこの白式を作ったのは何を隠そうあの束姉なのである。

本当は日本の企業が最先端の技術で作ってくれるはずだったのに、束姉が。

「いーくんのISは私が作るんだよお！」

といい、その企業にあったコアを盗みだし作ってくれたのだ。

自分で作れば良いのに盗んだのは、「めんどくさいから」らしい・

・

「本当は装備が入るしかかったんだけどな、俺はステゴロの方が強かったから要らなくなったから、束姉が入れた能力、それはな・
・
・」

「エネルギーを吸収する、ただそれだけだ。」

「!!!!!!」

流石にオルコットも驚いてるな。

「だけど流石にそんなチート能力はスロットを喰う量も半端じゃないんでな、右手首上からしか効き目が無いのが痛いんだけどな・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして、その吸収したエネルギーは自分で使える、それがこの羽な」

俺は右肩から生えているオレンジ色の羽を指差しながら言った。

「・・・・・・・・そ、そんな機体がありますの!?!」

久しぶりに口を開いたと思ったら苦情であつた。

「あるんだから仕方ねえだろ?、それなら、見せてやるよ」

俺は右拳を引いて溜め、殴る準備をすると、

「な、なら貴方の右手が間に合わない時間差で撃てば!」

オルコットはスターライトmkとビット4機をフルに使い、時間差を付けながらビームを打ってきた。

「ごめん、そんなの対策済みだから」

ズドン!!!

さっき迄溜めていた右手で地面を殴り、その衝撃で空に飛び出した。

だけどその速度は音速の域まで行き、オルコットが反応出来ない速度でビットに近づき掴み取るとそれを――

「せえーの、そいやああああ!!!」

振りかぶってビットの方に投げると、

ドォンーヒューンドォンーヒューン!!!

ピンボールさながらに連続して当たっていき四機すべてのビットは落ちていった。

「な、そ、そんなの有りですよ!？」

スタッ

俺は地面に着地し、右肩の羽を一つ昇華する。

「オルコット、そろそろ行くぞ、俺の必殺技PART1」

俺はまた右手を引いて溜めを開始する。

そして俺は地面を蹴った。

ただそれだけの事なのだか、その勢いは凄かった、それこそブーストを使っているのでは無いかというくらい。

そう、肩から生えているオレンジ色の羽は言わば一時的なドーピングのようなものである。

そのまま俺は横に回転しながらオルコットとの距離が後少しというくらいになった時に――

「かかりましたわ」

にやり、と。オルコットが笑うのが見えた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

さっきまでのビームを打つタイプではなく、これは『ミサイル弾道型』だ。

関係ないんだよ……！！！！

「衝撃の……！！ファーストブリット……！！」

ミサイルが発射された瞬間に回転を止め、右ストレートをかます。

ただそれだけだ。

俺には武器と言える物は無いが、武器ならある。

俺はいつだって、木刀相手だって改造エアガンにだって、警棒にだって、この拳一つで勝ってきたんだ!!!

「これが俺の自慢の拳だ!!!」

ドガアアアン!!

赤を越えて白い、その爆発と光に包まれた。

「一夏っ……………」

モニターを見つめていた筈は、思わず声を上げた。

「ふん……………終わったな、まあ、一度は折れたほうが今後の為か……………やれ、一夏」

千冬はわかったかのようにモニターを見ながらにやけていた。

「か、勝ちましたのわたくしは……」

まだ、煙が舞っているアリーナでセシリアは肩で息をしながらその煙を見ていた。

「まあ、予想外ではありましたが面目は保てましたわね……」

そう言うとセシリアは安堵のため息を一回した。

ブオオオン……!

「!!!!な、なんですの!?!」

いきなり煙が晴れ、煙が渦を巻いている。

その渦の中心には――

「殲滅の!!!!!!セカンドブリット!!!!!!」

回転をしている白式、織斑一夏がいた。

肩の羽は二本も無くなっていた。

デユウウンナー

一夏は今度は空気を殴って、セシリアに向かっていった。

「そ、そんな事が！わたくしが、このセシリア・オルコットが男なんかに負ける訳には行きませんの！！！」

オルコットは無我夢中にこちらにスターライトmkを向けたがもう遅い。

もう俺の手の届く範囲、つまり俺のテリトリー。

「一辺、折れて来い、折れなかったらまた折ってやる、もしも折れたら・・・ポトフでも食わしてやるよ。」

そして、俺の右ストレート、セカンドブリットはオルコットに当たり、ブルー・ティアーズの『絶対防御』が発動し、エネルギー切れとなったブルー・ティアーズ、つまり

『試合終了。勝者 織斑一夏』

これにてクラス代表決定戦は俺の勝利をで幕を閉じた。

そんな機体がありますの！？ 少し折れて来い、それから飯でも食え！

（後

流石にやりすぎたかな？

ネタは、「幻想殺し」と「シエルブリット」なんですけど、駄目ですかね？

自分的には肉弾戦をやってもらいたくてこの能力にしたんですけどね？

法律美容外科 オルコット、その鼻歌やめい！ （前書き）

早く原作の二巻位に行きたいですけど、やっと一巻なんですよね・
・

今回の話は半分位が原作引用なのであまり面白いとは言えないですが、それでも良いと言う方は見ていってください。

感想やら、意見やら気軽に書いていってください。

では、MY PACE WORLD 初めです。

法律美容外科 オルコット、その鼻歌やめい！

「武装無しでよく頑張ったな、それでこそその我が弟だ。」

試合が終わってピットの方に戻してみると千冬姉に筭、山田先生がいた。

「一夏よ！？そのISはあの人がつくったのか！？」

筭がこつちに詰め寄りながら聞いてくる。

「あ、ああ、俺が試験を受ける前にあったから・・・丁度一ヶ月位前に有ったとき、この白式渡されたんだ。」

手首に付いている待機中のISを見せながら言った。

「そ、そうか・・・（あの女狐・・・いや、女兎め）その時あの人は何か言ってきたか？」

「そうだな、強いて言うなら「いっくんひっさしぶりだね！結婚しようよお！」って言われたのが一番印象的だったな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・力チャ」

あ、あれ・・・・・・・・何だろこの空気・・それに箒なんて木刀をいつの間にか持つてるし、しかも千冬姉まで・・・・・・・・って！？千冬姉！？それって真剣じゃ！

「一夏よ・・暫く会わない内にそこまでいやらしく為ってしまったか・・」

箒さん、怖いですよ・・

「ほう、私の幼なじみがそんな事を言ったか・・良かったじゃないか馬鹿弟よ・・」

千冬姉、棒読みも怖いしそれに、何故に二人とも笑顔！！！！

「おや篠ノ之、思うところは同じようだな」

「ええ、織斑先生、そこで一つ提案があるのですが・・」

目をあわせながらにやけている二人が何だか怖い。

「今日の試合は意外と早くに終わってしまいましたのでここは一つ

私たちが一夏に暴り・・・稽古を振るってあげませんか？」

今暴力って言い掛けたよね！？」

「それは良い提案だな篠ノ之、それに木刀じゃやりづらいだろう？
これをやろう」

千冬姉は「なぜか」持っていたもう一本の方の真剣を箆に貸した。

てか銃刀法違反なんじゃ！？

「「さあ、一夏よ・・・」遊ぼうか・・・」

「ま、待ってくれ千冬姉に箆よ、俺たちには口がある、言語がある、
そして心がある・・・やめないか？」

「「ううん！止めない！！」」

二人とも綺麗な笑顔で言わないでくれないか・・・

真剣の光の方が綺麗なんだけどな！！！！

その日は日暮れまでリアル鬼ごっこが開催されていた

セシリアSIDE

サアアアア・・・。

シャワーから熱めのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れていく。

白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちょっとした自慢だ。

胸は同い年の白人女子に比べると幾分慎ましかとはあるが、それが全身のシルエットラインを整えている要因でもあるので本人としては複雑な心境らしい。しかしそれも白人女子と限定すればの話であって、日本人女子と比較すれば充分どころか大きい位だ。

（負けましたわ、今日の試合は　　）

とても卑怯な機体を使ってきた相手だった。

しかし彼は多分その〝卑怯〟が無くて、普通のISでも多分自分に勝ってしまっているだろう・・・そう、〝分かって〟しまう・・・

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって、この「分かって、しまった事が酷く落ち着かないものだった。」

（ 織斑、一夏 ）

あの男子の事を思いだす。あの、強い意志の宿った瞳を。

他者に媚びることの無い眼差し。それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった・・・）

母は名家の令嬢だった。

そんな名家に婿入りした父は母には多くの引け目を感じていたのだろう。

小さい頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』と心に抱いていた。

そしてISが発表されて女尊男卑の社会になってから父の態度は益々弱いものになった。母は、どこかそれが鬱陶しそうで、父との会話を拒んでいた。

それに比べて母は強い人だった。

女尊男卑社会以前から女というアドバンテージがありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた人だった。厳しい人だった。けれど、憧れの人だった。

そう、『だった』。両親はもういない。三年前に事故で他界した。

手元には莫大な遺産が残った。それを守るためにあらゆる勉強をした。

その一環で受けたIS適性テストでA+が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。

両親の遺産を守るため、二つ返事でした。第三世代装備ブルー・テイアーズの第一次運用試験者に選抜された。稼働データと戦闘経験値を得るため日本にやってきた。そして出会った……織斑一夏……自分の幼少期、自分の理想の強い瞳をした男と。

「織斑、一夏……」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。

「……」

熱いのにかく、切ないのに嬉しい。

なんだろう、この気持ちは。

知りたい。

知りたい。一夏の事を。

「・・・・・・・・・・」

浴室にはただただ水の流れる音だけが響いていた。

法律美容外科 オルコット、その鼻歌やめい！ （後書き）

ちなみに一夏のISの必殺技は『シエルブリット』だけではありません。

他にもありますよ？

ネタは万全ですからね……

人間の限界越えてるんじゃないくて？ 大丈夫だ、格ゲーではデフォだしな

グーテンモルゲン）。・。・。

どうもマイペースです。

今回の話には格ゲー要素、プンプン要素が含まれています。

好きな人は読んでください。嫌いな人は・・・読んでください。

感想やら意見、提案などがありましたら気軽に下さい。

では、 M Y P A C E W O R L D イッツ・ショータイム!!!!

人間の限界越えてるんじゃないくて？ 大丈夫だ、格ゲーではデフォだしな

翌日、朝のSHR。

「では、一年一組代表は、織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりで良い感じですね！」

クラスの女子は大いに盛り上がっている。

山田先生、繋がりが良くて俺は嫌ですたい……

「ていうか、良くセシリアが代表譲ったよね？」

「そうよね？あんなに男がとか言ってたのにね？」

数人の女子が疑問に思っているのか、所々でつぶやいていた。

「それならこのわたくしが説明いたしますわ」がたんと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。様になつてるのがうらやましい……。

「聞けば一夏さんは専用機持ちにしても、まだ日が浅いにしてものわたくし、セシリア・オルコットを倒したのです。これでISの使い方が完璧になればクラス対抗戦では負けは無くなりますわ」

おおー！！と歓声を上げる女子達。

対抗戦に勝つと学食のデザートが半年無料券が貰えるらしい・・・
女子はデザートのために俺を生け贄に捧げるのかよ・・・

「やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠けませんもの」

いや、戦闘ならいつも喧嘩してるから事足りてるからなあ。

あ、でもISを使った戦闘は・・・やっぱりそういう役職にならないとできないよなあ。

流石に不良相手にISつかったら・・・無双だわな・・・

「そ、それですわね」

咳払いをして、顎に手を添えているセシリア。

「私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ、わがクラスを勝利へ」

バン！

机を叩く音がクラスに響いた。

「そんな横暴が許せるか！貴様が教えるなら私が教えるわ！」

立ち上がったのは箒だった。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aの私のように何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！一夏は私のルームメイトだ、ルームメイトが教えるなら気軽に出来るから一夏も緊張せずに出来るからだ」
まあ、それなら理には叶っているが、オルコットからISの運用云々聞くのは良いなあ・・・

てか、

「箒ってランクCなんだ・・・」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

そんな大声で言わんでも・・・

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いていってセシリアと箒の頭に出席簿を落とした千冬姉の低い声が告げる。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな」

流石のオルコットも千冬姉に言われては反論の余地が無いらしい。
「代表候補生でも一から勉強してもらうつ前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

流石は大佐殿だぜえ！

俺たちには言えないような事を言っただけ、そこに痺れる憧れるう！！！！

二十四年も生きてる人間はわけが違っぜ！！！！

バシン！

「……お前、今何か無礼なことを考えてただろう」

「そんなことないですよ大佐殿！ただ流石は俺たちよか年食ってるな————」

バシンバシンバシン！

「……さ、流石は千冬姉、まだまだお若いです……」

「ふん、わかればいい」

計四発のメテオは俺の脳細胞を死滅させていったのであった。

「クラス代表はこの馬鹿。異存はないな」

はいと、クラス全員が一丸となって返事をした。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践して貰う。織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

あれから数日がゾンビクリムゾンし四月も下旬。

俺は今日もこうして大佐殿に教鞭をふるってもらっている。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

（やばいな、そろそろ叩かれるな、来い）

左手で右手首のISを叩く。

この動作が一番しっくり来た。

他にも仮面ライダーのポーズを真似たりしたが……全部駄目だし時間かかるからパスされた。

刹那、右手首から全身に薄い膜が広がっていくのがわかる。

約0・7秒の展開時間。

俺の身体にIS本体が形成されていった。

（やっぱり軽いな）

ふわりと体が軽くなる。各種センサーが意識に接続され五感が変わっていく。

同じく、セシリアもISを装備して浮かんでいる。

この数日間の交流で呼び方を変えたのだが初めて名前を呼んだ時セシリアは、顔を赤らめて伏せてたけど・・・

「よし、飛べ」

言われて、セシリアとほぼ同時に上昇した。

因みに普通は急上昇、急降下の時のイメージは『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で行うらしいのだが俺のイメージは『銃から弾が出るイメージ』で行っている。

そのイメージのおかげなのかセシリアよか高い位置にいる。

「本当にISって凄いよな、飛行機よか速く高く行けるんだからよ、浮かんでいるのも不思議だしな」

まあそこらは東さんに聞いたことあるからだいたい、理解して
るから良いんだけど・・・やっぱり現実味が無いんだよな・・・

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「そこら辺は、理解してるから大丈夫だ。」

良くクラスの奴ら、たまに教師が引くくらいの頭を使う話をセシリアとするがその時のセシリアの顔は

「それもそうですわね、一夏さんは、理解なさってるのですから、
楽しそうに微笑むセシリア。

その表情は嫌味でも皮肉でもなく、本当に単純に楽しいという笑顔
だった。

あの試合以降、何かと理由を付けて俺にISの運用法やらを教えて
くれる。

そのおかげで前よかISを動かせるようになった。

今だったらこの前の「ドイツ」代表生倒せるかな？

「一夏さん、今女性のこと考えてませんでしたか・・・」

ぷうっと頬を膨らませながらこつちを睨むセシリアなのが・・・
なんだろう、怒っているのが解るのに可愛いと思ってしまう。

「もう、いいですわ、後で聞きますから。そのときは二人きりで」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

いきなり耳を襲撃した音声の出所は遠くの地上の山田先生のインカムを奪取した筈だった。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止わやってみせろ。目標は地表から十センチ、織斑は一ミリだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

いって、すぐさまセシリアは地上に向かう。

大佐殿の命令を了解出来ない俺はどうしたら良いのだろうか？

一ミリって・・・

「いつ見てもうまいもんだなあ。」

セシリアは難なくクリアしていった。

よし、やってみるか。

俺は意識を背中の翼状のブースター……ではなく、足に意識を集中させ

「俺の妙技、PART1」

空気を蹴った。

つまり二段ジャンプの要領で空気を蹴りブースターを使わずに急降下したのだ。

（しかし、試してみたかったとはいえ二段ジャンプって結構速度出るんだな）

地上がもうそこまで来ているのもう一回空気を、地上側を蹴り速度を殺しブースターを噴かして完全停止をやった。

「見事だ織斑、しかし普通には出来ないのか？」

「いやあ、やりたかったもので！」

多分今おれ滅茶苦茶きれいな笑顔だと思う。

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「大丈夫だ。問題ない」

「そう。それは何よりですわ」

また楽しそうに微笑むセシリア。

なんだか可愛いなあ・・・

「・・・・・・ISを装備していて怪我などするわけがないだろう・・・」

そこに筈が頬を膨らませながらセシリアを睨んでいる。

うーん、何だろう、女の子が頬を膨らませたら可愛いと思うのは俺のフェチか？

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前がいうか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

「……前言撤回、なにこの娘たち怖いんですけど。」

人間の限界越えてるんじゃない？　大丈夫だ、格ゲーではデフォだしな

来ました。

格ゲーではよくあることだからやってみたが大丈夫かなあ二段ジャンプ。

実際ISなんつうトンデモスーツが有るんだから良いかなあ〜なんて気で書いてしまった。

反省はしている、後悔もしている、だが直す気は無い！！！！

武装がなければ必殺技をすれば良い！

ミスタードリラーなう

（前書

4日も過ぎてしまった16の春です。どうもマイペースです）。・
・。）

最近一番くじを引いたらB賞を当ててしまいここ一年の運を使い果たしたと思うんだけど・・・

感想やら意見等を貰えると実はマイペースはガッツポーズを取っていますので気軽に書いていって下さい。

では MY PACE WORLD 始まっています。

武装がなければ必殺技をすれば良い！

ミスタードリラーなう

「おい、馬鹿ども。邪魔だ。端っこでやっている」

千冬は箒とセシリアの頭をアイアンクローしながら押しやっていた。そして俺の前に立ち。

「織斑、武装を展開しろ」

「そんなもの欠けらとてございません」

「そうか、そういえばこの白式には武装が無かったな」

千冬姉め、わかってていいやがったな！

そんなんだから二十四になっても貰い手が「バシンバシン！」・・・俺の心にはセーフティガードやらプライバシーやらファイアウォールは無いらしい。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。普通は光の奔流を放出するのだが、セシリアのそれは一瞬光っただけだ。

光が止んだ後その手には狙撃銃『スターライトmk』が握られていた。

しかもマガジンが接続されていて、セシリアが視線を送るだけでセーフティーが外れる。

一秒もかからずに狙撃可能まで完了していた。

良いんだが……そのポーズとドヤ顔、どうにかならんのか？

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。貴様は横に銃身に向けて誰に撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な」

「直せ。いいな」

般若降臨しましたあ！

言葉の暴力良くないぜ、千冬姉よ……

「……はい」

あの顔は絶対文句言ってるぜ！

例えば年増と「バシンバシン！」……………

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

ほらないきなり振られた会話にびっくりしてやる。

絶対文句言ってたよ……………

銃機をを光の粒子に変換 『収納』^{クローズ}をし、新たに近接用の武装を
『展開』^{オープン}……………俺には一生縁の無い『セリフ』だわな……………

セシリアはてこずっているのか、手の中の光はなかなか形をとらず、くるくると空中をさまよっている。

「くっ……………」

「まだか？」

「す、すぐです。」

ああ、もうっ！『インターセプター』！」

これは武装を展開できないときに名前を叫んで頭の中のイメージを集中させ展開できるようにする。という所謂『初心者用』の手段である。

代表候補生というエリートの肩書きを持ったセシリアにとっては屈辱的だろうに……

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実践では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懷を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、一夏さんが専用機持ちだから、その……」

そこから先がごによごによとまごついて、セシリアの言葉は聞こえなかった。

とりあえず俺は個人間秘匿通信で、

『俺のせいにするのはやめてくれ、後で千冬が怖いから・・・』

『あ、あなたが、わたくしにとびこんでくるから・・・』

『仕方ないだろ？武装が無いんだから・・・』

本当に仕方ないだろ？

『と、とにかく責任はとって頂きますわ！』

『逆ギレ良くない』

「ん、まだ時間はあるな、よし織斑、何かやれ。」

千冬姉、人はそれを無茶ぶりという。

まあ俺も実際飛んただけだしな、仕方ない。

「はぁ、仕方ありませんね。セシリア、一発頼むわ」

そついいセシリアの方に向かって右拳を突き出した。

「仕方ありませんね、では行きますわよ」

そついいセシリアはスターライトmkを俺に向けて、引き金を引いた。

銃口からでたビームは俺の拳に被弾すると吸い込まれるように消えていき、俺の肩から一本の小さな羽が出てきた。

「おりむー、今日は何やるの？」

俺に聞いてくるのは通称・のほほんさん。

読んで字のごとくのほほんとしている方だ。

なんだかマイナスイオン、否！プラスイオンを放出していそうなの雰囲気は心が和む。

「そつだな、のほほんさんはどんな技が見たい？」

「うーん、そつだなぁ……かつこいい技ならなんでも良いよ！」

満面の笑顔ありがとうのほんさん。

さって、どんな技やろうかな……。あっ！そうだ、あれをやるか！

「じゃ千冬姉、今からやるので皆を下がらせてください」

「だから織斑先生と」「この前のポトフ旨かったですか？」……。皆下がれ」

千冬姉は皆を後ろに下がらせた。だけど女性としてヨダレが垂れるのは感心しないな。

皆が俺から30メートル位離れてから俺は肩の羽を一枚昇華させて、右拳を地面にぴとつとくつつけた。

「俺の必殺技PART・2、二重の極み」

その瞬間地面は爆発物で発破しかたの如く地面が抉れて、跡地には大きなクレーターが出来ていた。

説明しよう！

『二重の極み』とは、刹那の間に二発殴る。ただそれだけなのだが、威力は普通に二発殴るより数倍高く、修得するのに数年はかかる。

（いやあ、懐かしいなあ、千冬姉にいきなり川原に連れていかれて二重の極み修得するまで帰るな！とか言われたのを・・・小六の良い思い出だよ・・・）

そう思いにふけっていると後ろから声をかけられた。

「よし、そろそろ時間だ。・・・織斑、それを片しておけよ」

・・・・・・What？

片すってこの穴をですかい？

・・・他の業にすれば良かった・・・

武装がなければ必殺技をすれば良い！

ミスタードリラーなう

（後書

実は来週の水木金は学校の行事で長野に行くので投稿がストップしてしまっているのでそれまでに一巻を終わらせたいです。

ニ―ハオ！私は鈴アルヨ！

実際の中国人はアルとかは使わない

（前書き

言い訳をさせてくれ）

；）！！

実は今日から学校の郊外学習の一環で長野に行きます。その用意やら準備などでじかんが無かったので投稿出来なかったし、短い・・・

それでも良かったら見ていってください。。

二一八才！私は鈴アルヨ！

実際の中国人はアルとかは使わない

「ふうん、ここがそうなんだ……」

その夜。IS学園の正面ゲート前にポストンバックを持った小柄な少女がいた。

外見、より制服が改造されているのだがこれは良いのだろうか？

肩口がごっそり無くなっており、色さえ変えれば某例大祭にでもでれるであろう。

「えーと、受け付けてどこにあるんだっけ……」

ポケットから出した紙切れを出したが、その紙はくしゃくしゃに為っていたのが彼女の性格を表していた。

「本校舎一階総合事務受け付け……だからそれがどこにあんのよ」

少女はさっき広げたばかりの紙切れをまったくしゃくしゃにしポケットにねじ込んだ。

「あ、そういえばあいつこの学校にいるんじゃない！だったら」

女子はおもむろにケータイを取出し慣れた手つきで電話帳を開き電話をかけた。

久しぶりに会うけど、元気かな・・・中学には、あんな事があつて荒れてたけど・・・

プチッ

『もしもし？』

「あー一夏！わたし、鈴だけど！」

『あ！鈴か！懐かしいなあ〜どうし』一夏あ！！まだ話が終わっていないぞ！！』げっ！箒、俺が何をしたんだよ！！』

『そうですわよ一夏さん！今度は何組の女の子をたらしこんだんですの！？』

『ああ〜セシリアもだから違うって言ってるだろうが！！！！スマン！鈴、また後でかけ直してくれ！』『鈴って誰だ（ですの）！！』・・・プチッ』

電話が切れた……

誰？

私は今一夏に電話をしたはずなんだけどな……

なんで女の子の声がするのよ……しかも親しそうなの？
たった一年合わないだけで、一夏は女つたらしに為ったらしい。

電話をかけた時の胸の高鳴りは嘘のように消え、ひどく冷たい感情
と苛立ちが雪崩れ込んで来た。

それからすぐに受け付けは見つかった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん」

事務員さんの言葉などそっちのけで意識がどこかに行っている。

見るからに不機嫌ですよ。と言わんばかりに唇を尖らせながら聞いた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。凰さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表に為ったんですって。やっぱり織斑先生の親族だけはあるわね」

事務員のお姉さんは知ってることを言っただけだった。

だが、その情報は断片的にしか本人にしか届いて居なかった。

「・・・二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと・・・聞いてどうするの？」

鈴音は満天の笑顔と血管マークの顔に・・・

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって
」

その手にはおもちゃと思われるナイフが握られていた。

再開とは時に悲しいものね

幼なじみにナイフ向けながらいうな！

「おりむー、おはよー。ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

昨日なんだか『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と言うパーティーに主席し、まだ疲れが残りつつ教室に着いてみるとのほほんさんに話しかけられた。

中学の時と比べると女子と話をしてるのは一歩前進だろう。

・・・あの時女子として話した事があったのは・・・片手で事足りるからなあ。

「今の時期に転入生って、珍しいな？」

今はまだ四月だ。时期的にはもうずれてるとしか言い様が無い。

「そうなんだよ、なんでも中国の代表候補生なんだって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

中国・女の子・強い、これで連想されるものが俺の知り合いに居た

はずだ。

しかも昨日の夕方辺りに電話があつたのを覚えている。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

セシリアがどや顔と腰に手をあてポーズをしながら言っているのだ
が……

「……あ、ああそうだな……」

俺は内心びくついていた……

もしも予想通りに鈴が転入してきたのなら覚悟しなくては行けなくなってくる。

「まあ一夏ならそんなに気負いしなくても良いだろう、代表候補生
だろうと来月のクラス対抗戦で一夏には勝ってもらわなくてわな」
篤が自分の事のように話している。

「まあ、やれるだけやってみるが……」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝って頂きませんと！」

「そつだぞ。一夏らしくないぞ」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

みんなみんなが好きに言ってくれるぜ……

「織斑くん、頑張つてねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

クラスの女子たちはみんなもう優勝商品のフリーパスを貰ったかのようにテンションが高くなっていたのだが、

「その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえたから見てみるとそこには小型のラジカセがあった。

「一夏、平和ボケし過ぎじゃない？」

その声は次に後ろから聞こえてきた。

ひたっ

冷たい感触が首に当たっている。

「・・・再会だつていうのに言葉じゃなくてバタフライナイフで挨拶って、長らく故郷に帰ってて、日本の挨拶忘れたか？」

俺は平静を装い、後ろにいるであろう「幼なじみ」に言い放った。

「何言ってるのよ一夏？中学の頃なんかもつと酷かったじゃない？」

・・・やっぱりだ・・・俺の中学の頃を知っていて、この首に当たっているバタフライナイフの形状、こいつはやっぱり・・・

「挨拶ってのはな、ゝただいまゝとおかえりゝって言うんだぜ・・・鈴」

「そうね、じゃあ言わせてもらっわ、ゝただいま一夏」

「そうだね、ゝおかえりゝ鈴」

鈴、凰鈴音、俺の幼なじみにして中学の頃の俺を知っている。

鈴は首に当たっているナイフを離すと・・・

「さて、一夏、教えて貰っわよ！昨日電話してた時に一緒にいた女の子ってだれなわけ！？」

こちらに指を差しながら問い詰めてくる。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れる。

「・・・ちなみに質問だか、教えたらどうする？」

「勿論、少しばかり、オハナシ、するだけだよ、大丈夫よ、一夏には迷惑なんてかけないから」

笑顔で答えた鈴だったが、手元を持っていたナイフが煌めいていてそちらに目が行ってしまう。

「それは遠慮したいんだけど・・・」

「遠慮しなくても良いのよ！」

鈴はナイフを持って突進してくる。

「一夏あ！！！！」

「一夏さん！？」

箒やセシリアが各々俺の名前を叫んでいる。

多分心配してるんだろう・・・だけど！

鈴はナイフを斬るではなく、刺すように俺に向け突進してくる。
パキンッ！

「鈴・・・そんな、オモチャで遊ぶなよ、鈴こそ平和ボケしてんじゃねえか？」

俺は刀身を真横から殴り、ナイフを折った。

「やっぱりナイフじゃ駄目か？だったらこれでも大丈夫だよな！」

そついい鈴は両手を左右逆の袖に入れ何かを掴むと袖から手を抜いた。

その手に掴んでいたのは

「ベレッタ・M92とデザートイーグルの二丁拳銃・・・これならオモチャじゃ無いわよね？」

「・・・おいおい、あつちでも銃刀法くらいあっただろうが・・・」

鈴が出したのは二丁の拳銃だった。だが、女の子の制服、しかも袖口に入れるなんて無理にも程がある。だがしかし鈴は出来るそつ、あの人、に教えてもらったからだ。

「一夏は文句言えないでしょう？この、暗器方、教えてくれたの、千冬さんなんだから」

「ええーと、確か中学の頃は彫刻刀やらコンパスだったような気がするんだが・・・いつの間にかそんな物騒なモンが入荷したんだよ・・・」

「べ、別に良いじゃない！さあ！早く昨日一緒にいた女の子の名前を「そんなモノを振り回すな馬鹿弟子が」へヴン！」

俺に銃身を向けていた鈴だったが、後ろからの奇襲に会い、気絶した。

やっぱり昼はラーメンよねえ！ 即席ラーメン腐ってやがる！

「貴様のせいだぞ！！！！！」

「あなたのせいですわよ！！！！！」

昼休みになりこっちの席にずかずかと早足できたと思ったら開口一番がいわれもない濡れ衣……てかなんで？

そりゃあ二人とも頭を押さえてる理由は授業中にばぁーとしてたからだけど俺は関係ないはずじゃ？

「自業自得だろうがよ、千冬姉の授業でばーっとすること自体が間違いなんだよ……とりあえず腹へったから学食いくぞ」

「む……ま、まあお前がそういうのならいいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

はいはいありがとうございます。

俺達三人、以外にも学食に行く奴らが学食に移動した。

俺は一応日替わりランチを買った。

「待ってたわよ、一夏!」

さつき衝撃的な再開をした鈴が仁王立ちでそこにいた。

「そこどけ、おばちゃんに食券出せないし、みんなが通れないから」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

ちなみに鈴のお盆にはラーメンとチャーハンが乗っていた。

男性なら食えない量では無いが、女子にはキツイ量ではあるな。

「早く席に座ってるよ、のびるぞ?」

「わ、わかってるわよ!大体、あんたを待ってたんでしょうが!なんで早く来ないのよ!」

「知らねえよ」

まあこいつがうるさいのはいつものことだし、とりあえず俺は食券をおばちゃんに出した。

「てか、どうしたんだよ。帰ってくるんだったら連絡位くれたってよかったじゃんか？」

「べ、別に良いじゃない！あんたを驚かせようとしてたんだから別に良いじゃない」

「そらそつだな。それより元気そつで良かったわ」

「う、あ、ありがとう・・・一夏こそ元気そつじゃない・・・」

再開の仕方はどうであろうとやっぱり、幼なじみが元気そつにしているのは良いな。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！一夏さん？注文の品、出来てましてよ？」
大げさに咳払いをする篤とセシリアに会話が中断される。

お？今日の日替わりランチは、ナシゴレン・・・学食で出るものかこれ？

「とりあえずあっちのテーブル空いてるし行くか？」

鈴を含めた全員に促す。計十数人が動いてなお座れたのは奇跡だろう。

「鈴、お前いつの間にか、暗器方、の中にあんな物騒なもん仕込みやがった？なんで、代表候補生、止まりなんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。二ユースで見たときびっくりしたじゃない」

やっぱりこいつ、暗器方の中身教える気無いな。

中学の頃から中身教えてもらったことなかったからな。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方とつきあってらっしゃるの！？」

・・・二人とも声が大きい・・・

それとそこのクラスメイト達よ、玩具を見つけた子供みたいな顔をするな。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ・・・」

「そうだぞ。鈴とはただの幼なじみであり、千冬姉の弟子仲間だよ」

「ただの………」

「睨むな怖いんだよ……早くそのベレッタを退けてくれ……」

「ふん！………」

鈴は頬膨らませてこっちにベレッタを突き付けていた。

「幼なじみ………?」

「あー、箒が知らないのは無理ないな、箒が引越していったのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校した来たのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちよつとぶりだな」

まあ、その間に「アレ」があつて鈴も千冬姉の弟子になって、暗器方を教えて貰つて……あれから鬼ごっこがリアル鬼ごっこに為ったんだよな……」

「で、こっちが箒。確か話した気がするが、小学校からの幼なじみで、俺の遊び場の剣術道場の娘」

本当は通いたかったのに、俺には如何せん「センス」が無かったの

で通いはしなかった。

「ふうん、初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

・・・なんだろう、二人ともただ挨拶してるだけなのに触れては行けないものを感じるんだが・・・

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「・・・・・・・・パスタ？」

鈴はセシリアの髪の毛を見て、`パスタ`と言った。

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ・・・・・・・・・・！！？」

セシリアの顔が白人の白さが無くなり、ゆでダコのように赤くなっていた。

「い、い、言っておきますけどわたくしあなたのような方には負けせんわ!」

「そ、でも戦ったらあんた、死ぬよ。悪いけどあたし、強いもん」

そろそくだわな、こいつの強いところは、暗器方の武器の豊富さでは無く、その豊富な武器を扱える器用さにある。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「い、言ってくれますわね・・・・・・・・」

箒は無言で箸を止める。セシリアはわなわなと震えながら拳を握り締めた。

「一夏、アンタ、クラス代表なんだって?」

「ああ、中学時代の『アイツ』を反面教師にしてな……」

「……………そう……………まあいいわ、」

ごくんとラーメンのスープを飲み干していった。

「じゃあ、また放課後に会いにくるからね!」

鈴は自分の食器を片付けに行つてそのまま学食を出ていった。

風穴あいて二回死ねえ！ 声優が違うぞ十勝娘！ （前書き）

君死にたもうなかれと、どうもマイペースです）。・。・（

最近あるゲーセンでハマってるゲームがあります。

そのことについては後書きにて書いときます。

では MY PACE WORLD 始まればます。

風穴あいて二回死ねえ！

声優が違うぞ十勝娘！

バキュンバキュンバキュン！！！！

キンツキン！！

俺の部屋、箒の部屋でもあるこの部屋では、刀の音がするのはよくあることだ。

だがこんなに部屋が硝煙で曇って、薬莢が転がるなんてことは無い。

しかも質が悪いことにその発生源は、刀まで持ってやガル。

「最つつつ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にもおけない奴！風穴あいて二回死ねえ！」

この台風の目の鈴は暗器方でありとあらゆる武具を取り出して、部屋中に乱射、乱切りをかましていた。

「・・・・・・・・どうしてこうなった・・・・・・・・」

それは今日のセシリア達とのISを使った訓練を終わらした時だった。

鈴は俺にタオルと飲み物を持ってきてくれたのだが、その時にすっかり、箒と同じ部屋だと言ったことがばれてしまって、その時に俺は、

「別に俺は良いと思うし、箒で助かってるよ。幼なじみだしな」

と言ったのが引き金だったのだろう・・・・

「というわけだから、部屋代わって」

「ふ、ふざけるなっ！なぜわたしがそのようなことをしなくてはならない!?」

時刻は八時すぎ。夕食も終わっておれがお茶をいれていると、いきなり部屋に鈴やってきた。

．．．．．なんだかやな予感がするんですけど．．．．．

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょ？私は一夏だったから平気だから代わってあげるよ。」

「べ、別に嫌とはいってない．．．．．それにだ！これは私と一夏の問題だ。部外者に首を突っ込んで欲しくない！」

「大丈夫。あたしも幼なじみだし兄弟弟子だし。」

「だから、それが何の理由になるというのだ！」

会話のキャッチボールが出来てない会話がここにある。ていうか、噛み合っていない。

というか、目の錯覚だろうか。鈴は荷物を持ってない。

ここまで願に引っ越しに来ているのに荷物が見えないのは不自然だ。

．．．．．まさか．．．．．

「鈴……」

「何？」

「荷物とかは、服の中か？」

「そうだよ？あたしは500キロを越えなきゃなんだったって、服に入れられるもん！」

「……中学の頃は50キロで止まっていたのにここまで増えると某英雄王の、四次元ポケット、並みだよ……」

「とにかく、今日から一夏と同棲するのは私だから」

「ふ、ふざけるなっ！出ていけ！ここは私の部屋だ！」

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃない、下手すれば一夏と寝るし」

「勘弁してくれ、俺たちはもうガキじゃねえんだし。」

女の喧嘩は何かが食べないと言うが、ごもつともだ。頭が痛い。

「／／／／／、そんなことはさせん！とにかく出ていけ！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「早くでていけえ！！！！！」

激昂した箒はいつでもとれるようにベッドの横に立て掛けてあった竹刀……の隣にある木刀を握る。

「ちょ！やめ」

止める隙はあったが、それが普通の人なら止めていたが、木刀がむかっていったのは、暗器方の鈴である。

スカッ……

「！！！！！！！！！」

箒が驚愕している。何でかというと、さっき待て１メートル位あった木刀が今は柄しか無くなっている。

それはというと

「今の一撃、切っ先のスピード、２００キロ位行っただけ、私に

は止まって見えるんだよね」

鈴の服の袖から顔を出す十数本の日本刀、サーベル、太刀等が木刀を細切れにしたからだ。

「・・・・・・・・・・」

多分驚いていたのは多分箒だけだった。

まあ、中二の夏休みの修行期間中なんかは千冬姉・・・寝てる最中に木刀を大きく振りかぶってたからなあ・・・

それに比べれば箒の剣速なんかは遅く見えるだろうよ。

「ま、良いけどね」

「・・・・・・・・・・」

気まずい。この空気に耐えるなんてことは俺には出きん。

「そういえば鈴、約束の事だけど・・・」

「うん。覚えてる・・・よね？」

うん、確か約束したのは小学校の頃だからあんまり自信無いし、中学の頃の方が、衝撃てきだったしな。

・・・あっ！？あのことが！

「鈴、覚えてるぞ！」

「そ、そうよね！当然の事よね！」

「ああ、確か鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」

「うんうんっ！」

鈴は擬音で、パツ、と出てきそうな笑顔を見せた。

ふふっ、やっぱり合っていたか。小学校の頃の約束を覚えているとは俺の頭も捨てたもんじゃないな。

「奢ってくれるんだろ？」

・・・・・・カチンッ！

その瞬間鈴から沢山の弾丸が飛んできた。

そして冒頭に戻るわけだが

「最低っ！最低っ！最低ええ！女の子の約束忘れるなんて本当に最低ええ！」

「ちょ！お前！いい加減にしろっ！そろそろ疲れてきたんだよ！」

あれから五分くらいだろうか？

そろそろ弾丸を避けるのが疲れてきた。

「もう知らないからね！」

バタンツ！

鈴は額に十字を浮かべながら自室に戻っていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さっきまで傍観していた筈がこちらを見ている。

しかもその目は、まるで残念な目であった。

「あ、あのおー、なんで筈さんは、そんな怖い目をしておられるの

ですか？」

「一夏。人間と言うのは物事を忘れるものだ。だがな、女の子との約束を忘れるとは……覚悟は出来てるな？」

「えっ？」

箒の手を見てみれば、いつの間に出したのかわからないが、木刀が一振り握られていた。

「おま！木刀は不味いし、どこから出しやがった！」

箒は歩み寄りながらこういった。

「そんなもの……ご都合主義だあ！」

そりゃ最強だわ……

パシンっ！

風穴あいて二回死ねえ！

声優が違うぞ十勝娘！

（後書き）

スサノオツエー（

；）！！

最近、自分はゲーセンにある『ガンダムエクストリームバーサス』にハマっており。

使用機体がスサノオなんですけど、まじでスサノオは強いですよ！

まだ、2000円位しかやってないんですが、自分はスサノオだけを極めようと思います（。。。。）

まあ、最近投稿が滞ってるのはゲーセンに入りびたってるからなんですけどね。。。。

まあ、こんな作者が書く作品ですが、感想や意見等はいつでも待ってますのでよろしくお願いします（。。。。）／

アンリミテッドってかっこいいわよね 鈴よ、着いてくれるか？

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と鈴。

絶対に千冬姉が仕組みやがったな・・・

代表候補生と暫定代表の噂の新生同士の試合とあって観客席は満席であり、VIP席の要人どもは血走った目で注目していた。

ちなみに会場に入れなかった生徒達は外のリアルタイムモニターが有るらしくそれで鑑賞している。

しかも、この試合は後々DVDに焼かれて全生徒に配られるらしい・
・

つまり、俺と鈴は詰まらない試合をしようものなら後々で、千冬姉に真剣でリアル鬼ごっこを仕掛けられるのである。

（まあ、鈴と試合をしたら詰まらない事にはならないだろうけどな・
・）

俺の視線の先では、鈴とそのIS『甲龍』が試合開始のときを静かに待っている。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください。』

アナウンスに促されて、俺と鈴は空中で向かい合う。

「一夏、今回の試合は私達にとって良い試合にしましょう。」

規定の位置から移動してきて握手を求める鈴だが……

「握手したらブスリだろ？もうその手のネタは飽きたよ……」

「あれ？ばれてた？」

鈴は手の平を文字どおり返すと手の平から日本刀が生えてきた。

しぶしぶ規定の位置に戻る鈴。

「そうそう、一夏。一夏のISの特殊能力だけど、あれってビームしか意味ないんでしょ？」

そう、それに関してはセシリアの装備は出来レース並に有利だった。

だが、ISの中にだって実弾や質量刀を使うISだってある。

「つまりはさ

」

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーツと鳴り響くブザー、それが切れる前に俺たちは動いていた。

「日本刀は吸収出来ないでしょ？」

鈴は先程手の平からだした日本刀を俺の方に投げてきた。

バキッ！

向かってきた日本刀の腹を横から殴り付けて叩き落とした。

日本刀は地面に刺さった。

「やっぱり駄目だね、だったら一本じゃなくって数十本だったら大丈夫かな？」

鈴はさっきの日本刀同様、手の平から刀という刀を出しまくり、しかも鈴の後ろの方にも曼陀羅のように刀が出てきてる。

「一夏、この程度捌ききつてよね？」

「鈴さんや、それは無理な相談だよな……」

ヒュンヒュンと、数十本の刀達が風を切りながらこちらに向かって来た。

それを俺は捌くために。

「108マシンガン!!!!!!」

昔懐かしの108発の蹴りで対応する。

だが、蹴りだけでは捌ききれない刀は手でとったり殴って折ったり等をして刀を落としていった。

「あああ、やっぱり捌ききっちゃうよね……けどね私のISにはまだ、カードがあるんだよ!」

「おう、来いよ。例えどんなジョーカーをきろつとこの戦いは負けないんだよ」

「当たり前じゃない、私だって負けたくないんだから。」

鈴は今度は両手にサブマシンガンが出てきてる。

どうやら鈴のISの能力は解らないけど、あれも、暗器方、を使えるらしい。

ズドオオオオオンッ！！！！

「！？」

鈴がトリガーを引こうとした瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

「・・・・・・は、不幸だ・・・・・・」

アリーナには遮断シールドがアルのだが、それを貫通して入ってきた衝撃波らしい。

「どうもこんにちは！！！！名前やら所属やらは言いません！！！！」

アリーナの中央からあがる煙には、三機、程、機影が見える。

声はスピーカー独特のエコーがかかっている声であるが声質から女だと言ったことが解る。

「いやいや、こんなにアイキャンフライしながらの登場とか、人間として燃えるでしょ？」

声質からさっきと喋っている奴は同じだ。そうすると、多分だが、相手の三機の内、二機は無人機だろう。

「あ、目的言ってなかったですねえ！」

煙が晴れるとそこには、黒い鎧をイメージさせるISが二機と、白を基調とし、白い、純白の鎧を持ったIS、多分こいつが声の主だろう。

「一夏さん、お上からの命令です。ここで」

その女性は鎧をこちらに向けると、こういった。

「拉致去れやがってください」

その時に女性のISは瞬間的なブーストをつかって俺と肉薄な所に

槍を突いた。

「あ。本気で抵抗して下さいよ？じゃないと生け捕りの筈が殺しちゃいますから。」

「女性があんまり殺す殺す言っちゃ駄目だぜ・・・」

俺は笑いながら目の前二メートルの女性に言った。

「鈴、お前はあの無人機の相手でもしてやれ。」

「うん。・・・気を付けて・・・」

回線で聞こえる鈴の声が震えている。

「鈴、心配するな、今までの、そして今の俺を信じる。」

「・・・うん。負けんじゃないわよ！」

そっぴい鈴は、残りの無人機の方に向かっていった。

「へえ、よくあの人形が無人機だってわかったね？」

「まあ、乱入してから一言も喋って無かったから自信無かったけど、今のお前の言葉でわかった。それにお前も無人機だろ？」

「あ、あれ？な、なんの事かなあ？」

「とぼけるな、俺から見えるその身体だってよくできた人形だろ？、多分拘束された時のデメリットを考えてだろうけどな・・・」

それにさつきから奴さんの身体の、細かく言えば筋肉の動きが全くと言って良い程動かなかった。

ただそこに置かれた人形に見えたから俺はそう仮定を立てた。

「・・・へえ、ただのISを使える男だと思ってたけどそこまで思考出来るとは思いませんでした」

女性は俺に向けていた槍をどかして後ろに飛び、距離を測っている。

「まあ、そう焦るなつて。買つてやるよ、この喧嘩」

俺もファイティングポーズをして臨戦体制に入った。

「そうだなあ、私、てかこの人形に勝つたら私がそっちにいつてキスしてあげるよ！」

スピーカー独特のエコーがかかった声が聞こえる。

アンリミテッドってかっこいいわよね 鈴よ、着いてくれるか？

(後書

ちなみにオリジナルISのデザインは『ガンダムデスティニー』の
アビスガンダムです。

雑種よ、私の財宝を見せてやる！ 鈴さん？キャラ違っからね？

（前書

最初に言っておく。後悔はしてないし反省もしない。

この話には鈴T U E E E E E E成分が入ってます。

それでも良いという方は進んで読んでください。

感想やら意見、待ってます。今回の鈴についての……『おい！
こら！』なセリフもどんどん下さい！

では、 M Y P A C E W O R L D 開幕です。

雑種よ、私の財宝を見せてやる！　鈴さん？　キャラ違っからね？

鈴SIDE

さて、一夏にも頼まれちゃったし、そろそろ始めるかな・・・

相手が地上から動かない所を見ると相手は飛べないのか？

とりあえず同じ土俵に行くとしますか。

ヒュウン。

私が地上に着地した瞬間だった。

二機の内、一機が手の平をこちらに向けてきた。

その手の平からだんだんと粒子が貯まっていき、そして

ピュウン！

射出された。

「よっど。」

射出されたビームは一直線に飛んできたので避けるのは容易にできた。

「じゃあ、お返しにこれでもあげるかな？」

私はさっきみたいに手の平から刀を出し投てきした。

一夏のように防ぐのはまず無理だろう。

一般的にあの捌き方はないから。

刀を投てきした瞬間、さっきビームを出したISは後ろに引き、もう一個のISが背中から球体みたいな物を出し、その球体がISの目の前で円形を描き、シールドのようなモノを形成し、飛んできた刀を消滅させた。

「……全く、そんなに簡単に消されると自信なくなるんだけどなあ……聞こえてるんでしょ……パイロットさん」

「……ふつ、やはり分かりましたか、中国代表候補生さん」

さっきシールドを張ったISからスピーカー音が聞こえてきた。

やっぱりあの連携のされかたは無人機じゃなかったか……

「けど、残念ながらそこにいるのはただの人形でしかありませんがね……」

「姉貴！こんなのに本当の事話さなくなつて良いじゃねえかよ！ど
うせここで殺すんだからよお！」

ビームを出す方のISからもスピーカー音が聞こえたと思ったら、
手の平をこちらに向けるとビームをまた出してきた。

「よつと。」

チュドン！

避けたビームが着弾した所の地面は捲れている。

威力は中々のようだ。

「・・・まったく、姉の方はちゃんとしてるのに妹の方はとんだ猪、
ある意味バランスがとれてる姉妹だ事で・・・」

「ふん、身内以外から言われると心に来るものがあるわね・・・」

「姉貴！俺たち馬鹿にされてるんだぜ！なんで冷静で居られるんだ
よ！」

そう、本当にバランスがとれてる姉妹だ。

攻撃的な妹が火力高めのISを、クールな姉が防御に特化したISを。

一機だけなら落としようは沢山あるんだが、二機が重なると1+1
＝1ではなく、2や10にでもなる。

本当に仲が良い。

しかも姉の方は防御だけで攻撃はしないところを見ると、容量全部をあの円形の防御に回してると思う。

「（はあ、一夏の右手だったら一発で粉碎出来るんだけど私じゃ火力不足かな？）」

そう思いながらも私は刀を投てきを繰り返してはいるのだが、やはりあの円形の防御に蒸発させられる。

「・・・姉貴、こいつ詰まんないよ・・・だって弱いよ・・・」

「・・・やはり、事前にデータを貰った甲斐が有りましたね、この「ベルフェゴール」の「シールド」を突破する火力は持っていないようですな」

「もう決めちまおうぜ！この「メリクリウス」の「粒子波動」で粒

子すら残さねえよ!!」

「やっぱり情報を持ってたのね・・・アンタたちどこの差し金よ・・・」

彼方もビームを放つ用意をいっているので一応今度はマシンガンを出しておく。

「・・・誰かは言えませんが、そうですね、あなた方、[〃]鳳鈴音[〃]と[〃]織斑一夏[〃]の中学時代の同級生とだけ言っておきましょう。」

「・・・・・・ほお・・・・・・まだ、[〃]アイツ[〃]は邪魔するんだ・・・」

「[〃]アイツ[〃]はスゲーぜ?あんたらの情報を余すところ無く教えてくれてしかもこのISまでくれたんだぜ!」

「・・・・・・解放、展開・・・」

「ああ?テメエ何言ってるんだ?まあ良いや。ここら辺・・・くたばれよ!!!!!!」

妹の方が手に粒子を集めながらこちらに突っ込んできた。

どうやら、ゼロ距離から放射するらしい、けど関係ないよ・・・

「アイツ」が関わってるんだったら手加減はしなくていいよね？

ザシュ・・・ジャキンジャキンジャキン

「な、なんなんだよ！！！」

金属が切り刻まれる音がアリーナに響き渡る。

切り刻まれるのは妹の方のIS、どうやってかという・・・

天空に余すことなく展開されている刀剣の数々。

その極一部が敵に降り注いただけである。

そして降り注いだ刀剣はISを磔にした。

「貴様なにをした！」

姉の方が私に問い掛けてきた。

何で聞くんだろう？私はただ……

「私はただ、武器を展開しただけだよ……」

「なっ！貴様の武器はただの刀剣と銃機を出すだけでは無かったのか！」

「それは手の平から出した方が様になるだけだからだよ、少し容量は食うけど少し離れた所にだって出したりそれを射出出来たり出来るんだよ。」

「そ、そんな情報はデータには無かった筈だぞ！」

「それはそうだよ、アイツが素直に情報を教えるわけないでしょ？」

そっついながら私は空に浮かぶ無数の刀剣を敵のISに切っ先を全部向けた。

「まあ、良いわ、この刀剣の数々、これが私が今出せる全ての刀剣よ。これさえ防げば貴方の勝ち、防げなかったら私の勝ちよ……」

」

「・・・ふん、私のベルフェゴールがそのような攻撃に食らうはずが無い、否！食らってわいけない！」

そういい、ベルフェゴールは背中から球体を出し巨大な円形のシールドを展開した。

さっきまでとシールドの色が濃いところを見ると最大出力らしい。

「行くわよ！」
ブレイド・パラダイム
刀剣舞踏会、！！！」

「うおおおおお！！！！！」

天空を覆う刀剣の数々は一斉に列を為しベルフェゴールに向かっていく。

次々と射出した刀剣はシールドに接触するとやはり、蒸発していった。

だが、接触のさいに段々とシールドが小さくなっていく。

百、二百、三百と刀剣はベルフェゴールに向かっていく。

・ だがそれは蒸発していく。シールドを縮小していくのを代償に……

ザザザザッザッ！

刀剣が外れ砂煙が上がる。

そして全ての刀剣の射出が終了した。

砂煙が段々と晴れていく。

そこにはシールドはもう消滅し装甲が所々削れては居るがベルフェゴールは立っていた。

「……ふつ、ふふつ、ハッハッハ！どうだ！耐え切ったぞ鳳鈴音！これで貴様は何もできな「ザシュ！」なっ！？」

全ての刀剣を耐え切った慢心からだろうかベルフェゴールは油断していた。

そこを私が一本の刀で切り捨てた。

「なっ！？貴様、もう刀剣は出せないんじゃない！」

「あら、敵の言葉を鵜呑みにしてくれたの？ありがとうね、騙しやすかったわよ。」

実は一本だけ残しておいたのだ。

これは千冬さんに教えて貰った、暗器方の基本『暗器の数を悟られるな』。だから私は嘘の数を教えた。

「・・・ふん、そうかこの場面は私の慢心から生んだ姿か・・・最後に教えてくれないか？」

胴体を横風ぎに切り裂いた為上半身と下半身が分かれ、地に伏せているベルフェゴールから、砂嵐混じりのスピーカー音から響いた。

「何よ。」

私はベルフェゴールの上半身に近づき言った。

「貴様と私は50メートル程離れていた筈だぞ、一瞬でどうやってこれた。」

「ああ？その事？それはね、刀剣解放で展開した刀剣に全部容量をはたいて、`軽くなつたのよ`」

つまり、刀剣を射出する事で、`データ`を`捨てている`事と同じ事であるため、刀剣を射出すればする程この機体は、`軽く`なっていき、あの早さが生まれる。

「なるほど、勉強になつたよ」

「それはどういたしまして・・・じゃね。」

刀でベルフェゴールの上半身の頭を貫いた。

「さて、こっちは終わつたし、一夏の方は「ドオオオン」！？何よ？」

音の発生源を振り向くとそこには、さっきまでの白い槍を持ったISが半壊している。

しかも首根っこを捕まれて吊り上げられている。その首を掴んでいる、一夏だった。

パイロットは一夏だったのだが、ISが違かった。

一夏の白式の白さは無くなり、今は溶岩のように赤く、血のような紅さを持つ『赤』だった。

雑種よ、私の財宝を見せてやる！　鈴さん？キャラ違っからね？

（後書

ベルフェゴールとメリクリウスはISに出てくるフルスキンのゴーレムと同じグラです。

これが俺の風林火山だああ！・・・本当に暑苦しいわね・・・

（前

ブラックオンスロット！！！！ブレイブルー発動！！！！

どうも（・・・）最近ブレイブルーのタオカカにハマっている
マイペースです。

いやあ、行きつけのゲーセンからブレイブルーが消えてアクアプ
ラの格ゲーが入るなんて聞いてないよ！！！！

感想や意見、一夏君のレベルアップなどどんどん書いていって下さ
い！！

では、MY PACE WORLD 開幕します。

これが俺の風林火山だあああ！・・・本当に暑苦しいわね・・・

「（身体が熱い・・・）」

俺は身体から嫌な位な汗をかいていた。

それは暑さによるものだ。だが今は夏では無い。

何故かと言うと

『紅』だからだ。

俺の機体がいつもの『白』ではなく、『紅』であるからだ。

そして俺はさっきまで戦っていたISの首根っこを掴んでいた。

その首の所も段々と溶け始めてきている。

なぜこのような状態になったかと言うと

一夏SIDE

さてどうしよう？

あのフルスキンの二体も遠隔操作だろうけど、相手が鈴じゃ勝てないだろうから心配要らないだろう。

問題は

「で、私達も始めちゃう？カウントするよ？10・・・9・・・」

槍をクルクル回しながらカウントし始めたこいつであろう。

彼女だけ機体が違うとすると多分フルスキンの二機より、権力が上か、実力が上なんだろう。

「・・・8・・・7・・・ヒヤア 我慢できない、0」

「てえ、ちよおま！！」

カウントを中断してISが突っ込んできた。

「ハイハイハイ！」

相手は自分のリーチに入ると頭、右腕、左腕、右足、左腕、胴体と各箇所突きを連発してきた。

しかもあまりタイムラグが存在しなかった。

「・・・ホツ、ハツ、とりあ！てめえ！九頭龍閃じゃねえんだから！！」

取り敢えず捌きはしたが四肢のほうにかすり傷が少し出来た。

「ヒャア やっぱり良いね一夏さん、あの織斑千冬の弟だけあるね」

「そりやどうも・・・てかお前も十分強いだろ？」

「・・・駄目なんだよ・・・こんな強さじゃ駄目なんだよ・・・」

教えてあげるよ、と槍を降ろして話し始めた。

「私はね、いや、私達はね孤児なんだよ・・・けどね産みの親は居ないんだよ・・・」

「・・・まさか話には聞いていたが・・・」

「ISを操縦するために産み出された命なんだよ。」

「・・・やっぱりか・・・」

「けどね、その企業じゃ適性が高くないと使ってくれないんだよ・
・生憎私達の適性はC止まり・・・」

「・・・それで捨てられたと・・・」

「そうだよ、しかも私たちは造られた生命だから寿命も短いんだよ・
・私達幾つに見える？生まれてまだ5年しか経ってないんだよ・
・」

「・・・」

「寿命も短くて、存在価値まで否定されて捨てられた時に、彼女
は私達の前に表れた。」

・・・彼女？

こいつらのリーダーの事か？

「彼女」は私達に存在価値を与えてくれた。そしてISを、それを使つたための力と知識をくれた。」

「……出来ればその「彼女」つつのが誰なのか教えてくれないか？そろそろ夏休みだろ。お中元でも贈つてやるよ……」

「大丈夫よ。一夏さん、貴方は「彼女」の事を多分、ここにいる誰よりも知っているよ……だってあなたは中学校の同級生なんだから。」

「……はあ、またかよ……」

「わかった、誰だか解つたよ。成る程、「アイツ」ならお前達みたいな奴等を助けるよ……だけどよ……！」

俺は瞬間的な移動をし、一気に自分の拳の範囲に飛び込み。

殴り飛ばした。

「クッ！」

相手はなんとか槍で防いだのでダメージは無いようだ。

「アイツが関わってるんだったら容赦はしない。俺はテメエを助けるために、アイツの犠牲者をもつ出さない為にテメエを殴り飛ばす。」

さっき殴った時に槍がへこんだのか彼女は槍を粒子に変換して、新しい槍を二本新しく出してきた。

「……やっぱり一夏さんは少し変だよ……みんな、孤児院の皆だって私達が造られた生命だって知ったら気味悪がってたのに、一夏さんは助けてくれるんだね……」

「当たり前だ。困ってる奴がそこに居るんだ。助けない道理が無いだろう？」

「ありがとう……だけど、私にも居場所を、価値をくれた人の為に戦わないといけない理由があるからね……行くよ!!」

二本槍を両手で持ち、こちらに突進してくる。

「お前のその意気、かわせて貰おう!」

俺も右手を引きながらブーストを吹かし、迎撃をしようとしていたのだが

ピリッ、パリパリッ。

「え？」

いきなり相手さんのISの頭部から放電し始めた。

「どうした！？大丈夫か！」

「う、うわあああ！」

敵は頭を押さえていて、聞こえる声はスピーカーのエコーに砂嵐混じりの叫び声しか聞こえない。

カラッ

両手に持っていた槍を手放し手をだらんと垂らして立っている。

ウイーン

いきなり敵のISの隣に四角いウィンドウが出てきた。

そのウィンドウには『SOUND ONLY』と書かれていた。

「まったく、あんなに情に流されちゃいけないって言ったのに流されちゃってさ、`兵士`が情を持ったらただの`人間`になちゃうじゃないか・・・」

この声、人の事をわかっている口調、この人を人と見ない口調・・・

「そういえば、久しぶりだねー君、リンリンもいると思うけど、懐かしいねえ・・・」

「・・・テメエ・・・中学の頃に漬したのにまだこんな事してたのか・・・」

「何言ってるんだいいー君！そこに困ってる人が居るんだ！助けない道理が無いじゃないか？僕は人を助けるのを生き甲斐にしているからね・・・」

「それで恩を売るだけ売って利用する。中学のこれから変わりねえな。」

「まあね・・・」

「それでそのISの操縦者はどうしたんだよ・・・」

『ああ、シオンちゃんの事？いやぁ最初はいー君とリンリンの詳細データを採らせようとそっちに送ったのに、シオンちゃんに情が生まれちゃってさ、だから電気ショックで気絶させてオートパイロットに切り替えたんだよ・・・』

「そうか・・・気絶か・・・なら良かった・・・」

『何？僕がシオンちゃんを殺したのかと思った？そんな事をしないのは分かってるでしょ。けど、シオンちゃんの事を気に掛ける暇が有るんだね』

そう言うときISは二本の槍を拾いこっちに向かってき、槍を突きを連発してきた。

のだが

『あちやぁ、やっぱり駄目か。』

ISは俺が居る場所より10メートル前で突きを連発していた。

『いやぁ、実はこのISはシオンちゃんが使ってこそのISだね。オートパイロットにするとバクが発生するんだよ。けどね一つだけオートパイロットにすると向上するスキルがあるんだよ。』

それはね、といった時にアリーナの席では無い、俺達ISが出撃するところ、つまりピットの所から

「い、一夏ああああ!!!」

ポニーテールが揺れていて、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「男が、そのような奴に勝てなくてどうする!!!」

どうやら、箒は激昂を飛ばしに来たのだろう。だけどマズイ!!

今日の前に居る敵は

「・・・話が途切れたね、このISが唯一向上するスキル、それはね」

そういうと、ISはいきなり二本のうちの一本を捨てもう一本を投てきをする体制に入った。

「投てきなんだよ。」

ISから放たれた槍は一直線にこっちに・・・否、箒の方に飛んでいった。

「マズイ!!!」

俺は全エネルギーをブーストに回し、箒の方に向かっていった。

「くっ！間に合ええ！！！！！」

俺は右手を伸ばして箒に向かっていった槍を

つかんだ。

「・・・い、一夏・・・」

目の前には箒が居た。どうやら、槍が飛んできて腰が抜けたのだから、地べたに座っている。

「箒、後で説教と拳骨食らわしてやるからな、そこで大人しくしてろ。」

『ああ、残念。けどもう一本の方で再チャレンジも有りだよね。』

そっつい、ISは落とした槍を拾い直したのだが。

「・・・テメエに再チャレンジはねえよ・・・有るのは無だけだ・・・」

手を抜く筋合いはねえ、本気で行かせて貰う！

「俺の情報が欲しかったんだろ？だったら見せてやるよ・・・絶対の恐怖をよ・・・」

俺は右手を前に掲げて左手で右手首を掴む。

「第666拘束機関解放！！風林火山発動！」

『行くよ？ゲイ　ボルグ！！！』

敵機が投てきした槍には今度は蒼いオーラが纏っていた。

多分今度は本気なんだろう。

だけど、もうお終いだ。

俺には紅いオーラが纏い始め、白式が白いボディが徐々に紅くなっていく。

俺は手を前に出した。

ジュウウ

飛んできた槍が前に出した右手に接触しただけで槍が溶けていった。

『凄いね！白式の色まで変わってるね！』

「そう、これが『風林火山』の火、紅赤朱。簡単に言うと火を使う事が出来るだけだ。」

そついい、俺は後ろに炎を出し、瞬間的に敵機の目の前に行き、首を掴み吊し上げる。

『・・・激しいね？女の子に嫌われるよ？』

「良いんだよ、夜は優しくしてやるよ。」

そして最初の方に戻るのだが。

『ふーん、僕の手作りのIS、キツツキの装甲を溶かしちゃうなんて凄いい炎圧だね。』

SOUND ONLYのビジョンから飄々（ひょうひょう）とした声が聞こえる。

「ああ、こんなガラクタ直ぐに溶かしてやるよ。フンッ！」

俺が力を入れるとキツツキを掴んでいる右手の炎圧が上がり、一瞬で溶かした。

『……予想外だったけどありがとうねー君。いー君とリンリンの良いデータ取れたよ。それじゃあまたね?』

「俺はもう会いたくねえよ、雀」

「SOUND ONLYは消えた。」

その声の主、世界最大の偽善者にして最大の悪、羽宮 雀はまた俺の前に表れたのだろう。

後日談って重要だよな・・・ここまで大変だったよね (前書き)

私には更新を遅らせる免許が有ると言っただけ!!

どうもMr・マイペースでござる(。。。)

いやはや、遅れてしまっただけで申し訳ないですはい。なんだかこの話は個人的には面白くなく。書くのに時間がかかりました。

感想や意見、はたまたネタ技の募集中でござる。

では、MY PACE WORLD キックオフです。

後日談って重要だよな・・・　ここまで大変だったよね

ー夏SIDE

「う・・・・・・・・・・・・・・・・？」

右手の痛みに呼び起こされて、目を覚ました。

取り敢えず言わせてくれ

「知らない天井だ。」

（確か、風林火山を発動させてよりにもよって紅赤朱なんか発動させたから反動があったのか？）

どうやら、ここはどこかわ解らないが、自分はベットのの上に寝ている。

「気がついたか」

シャツとカーテンがひかれる。確認する前に行動。・・・変わら
ないな、千冬姉わ・・・

「身体には致命的な損傷は無いが、炎圧^{えんあつ}が高かった右手だけ少し
ばかり火傷している。まあ利き手が火傷は地獄だろうが、まあ慣れ
る。」

「・・・だからって右手が包帯グルングルンって・・・」

千冬姉に言われて右手を見てみると包帯がアメリカンドックのよう
に膨れていた。

「・・・で、一夏。今回の襲撃の首謀者、^{せうぼう}羽宮 雀^{すずめ}について
なのだが・・・聞いても良いか。」

「千冬姉。それだけは許さないよ。アイツとの決着は俺か鈴で決め
るって決めてるんだ。もしも千冬姉が決着を付けたら俺は千冬姉・
・・・殺すよ。」

「ふん、冗談だ。さっき馬鹿弟子にも同じ事を聞いたら同じ解答が
帰ってきたよ。」

鈴もやっぱり思ってることは同じか。

『誰にもアイツとの決着を譲りたくない』んだよな。

「千冬姉……ごめん。」

俺の呟きを聞き、千冬姉は満面……とは言えないものの、笑った。

「大丈夫だ。おまえはもう一人で物事を片付けられる位に成長しちだが、困ったら私に言え。なにせ、私の弟だからな」

「そうだね、俺は千冬姉の弟だもんな。」

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

それだけ言い残すと、千冬姉はすたすたと保健室から出ていった。

「……そお……」

千冬姉との入れ違いに誰が入ってきたようだ。……なんだ？ カ―テンに隠れては居るんだが頭の尻尾が見えてるぞ？

「……はあ。入ってこいよ箒。拳骨は勘弁してやるからよ」

「……ほ、本当か。」

さっきまでは尻尾しか見えなかったカーテンから、そろお、と出てきたのはやっぱり箒だった。

「あ、あのだなっ。今日のことだけだな・・・」

「一つ言っとしてやろう、ISを展開せずに戦場に来たら、上手くて五体不満足。下手したら土と見分けがつかなくなるぞ?」

「う!?!その、すまんっ。」

「今度からやらないでくれよ。お前が傷つくのなんて見たくないからな・・・」

俺はそつと、手を箒の頭に乗せ撫でながら言った。

「ノノノい、一夏よ!み、皆が居ないからと言って・・・・・・・・し、失礼するぞ!」

箒は手を払い、保健室を出ていった。
そんなに嫌わなくても良いじゃん・

「あ、ヤバイ。眠気が・・・」

いきなりきた睡魔に俺はやられて、寝てしまった。

・
・
・
・
・

なんだ？なんだか口に違和感があるぞ？てか、何時間寝てたんだ・
・

「・・・・・・・・一夏・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ん？鈴か？」

「っ！？」

俺を呼ぶ声でわかったのだが、鈴よ。なぜキスなどしたんだ。

「・・・・・・・・鈴さんや。なぜキスなどされたのですか？」

「ち、違うわよ！た、ただ躓いちゃって当たっただけよ！！事故よ
！」

鈴は手をあわあわせ、顔を赤面させて後ろに引いていた。

「まあ、キス位だったら気にはしないよ。ノーカンノーカン。」

「そ、そうよね！・・・・・・・・アイツが、羽宮が現れたね・・・・」

鈴はまだ赤面のままだが、声は真剣のようだ。

「・・・大丈夫だ。中学の頃のように、行かねえよ。もう雀には負けねえよ」

「私、怖いよ。一夏がまた、アレ`变成了たりしたら・・・一夏が、アレ`に為たら誰も止められないし、下手すれば一夏も、`世界`も壊れちゃうし・・・」

「だから俺は鍛練を怠らなかった。もう、アレにならない為に、それに守るもんも増えちまつたしな」

「守る物って？」

鈴が問い掛けてきた。

そう、この学園に来てからまた増えちまつたしな・・・

「俺の周りの`世界`。お前や、千冬姉、箒に、セシリア。後は五反田とかかな？何も世界を守ろうなんて思っちゃいねえ。俺は俺の`世界`しか守らないよ」

「・・・一夏は変わらないよね。けど、そこに皆が惚れてるんだと思うよ。」

そうかい、と相づちをで返すと鈴はくるっと回って出口に歩き始めた。

「じゃあ、元気そうだし私は帰るからね？」

「ああ、……。鈴、絶対に手え出すなよ……」

「それはこっちの台詞よ一夏……」

「「アイツとの決着を着けるのは俺、私」だからなあ……」

そついうと鈴はそそくさと保健室を出ていった。

それから少しして、箒がきてチャーハンをご馳走してくれた。

だが、調理行程に問題があったのか味が無かったが、思ってみれば俺、何も食ってなかったじゃん……

で、事で、チャーハンを掻っ込む。時間にして1分位だろう。

その後、箒と他愛ない会話をしていたら保健室のドアが開いた。

「あのおー、織斑くん、筱ノ之さん居ますか？」

僕らの副担、山田先生だった。

「どうしたんですか先生？」

「あ、居ましたか。少し吉報がありますよ！」

どうやら「先生」と言う単語に打たれたのか山田先生は胸を張りながら擬音に『えっへん！』と付きそうなポーズを取っている。

先生！、服のボタンが悲鳴を上げております！！！！

「引っ越しです」

「・・・・・・へ？」

第よ、女子がそんなすっとんきょうな声を出すもんじゃないぞ。

「先生、主語を入れてください。」

「ああ、そうでしたね。やっと部屋調整が終了したので筱之乃さんは引っ越しです」

「・・・・・・」

箒よ、どうした？心ここに有らず見たいな顔して。

「良かったじゃねえか、男と同じ部屋なんて不便だったろ？」

「・・・一夏は私に居てほしくないのか・・・」

「いや、居てほしいも何も学校が決めたんだからそうなるだろうよ？」

そついうと箒は立ち上がり。

「山田先生、引っ越し、今すぐしましょう」

「え、ええ、別に今すぐでなくても良いですよ？用意が有るのなら明日にでも・・・」

「いいえ、今日で良いんです。・・・じゃないと離れられなく・・・」

最後の方に何か呟いていたが俺には聞こえなかった。

すると箒はこっちを向き、指をこちらに向け。

「一夏よ！ここで約束して欲しい」

「なんだよ……」

「学年別大会、私が優勝したら

」

「私と、付き合って貰うぞ／＼」

その時の箒の顔は赤らんでいたが堂々としていた。

ドキッ？男子二人（？）だらけの女子校目録！ 一夏・・・それは僕も含む

どうも、最近パチプロ風雲録なるゲームのヒロインの死に涙腺が崩壊したマイペースですたい（；；；）

いやあ、桂馬くんは良いことを言ったよ、「物語の進行や薄いシナリオの為にヒロインを殺すな！ロードだロードだ！」まったくですたい。

ヒロインが死ぬゲームが多いゲームをやると気分がブルーになりませんか？

例えば、カオスヘッド、月姫、パワポケ、恋姫などなど。

そんなこんなで今回も始まるわけですが、ここで注意を一言、今回の話には『ガンダム』を知ってないと解らないネタが冒頭にふんだんにあしらわれています。ご注意ください。

感想や、ご意見、不満やアドバイス等があれば気軽に書いていってください。

では、MY PACE WORLD テイク オフ！！

ドキッ？男子二人（？）だらけの女子校目録！ 一夏・・・それは僕も含む

六月頭、日曜日。

俺は久々にIS学園の外、てか、五反田の家に居た。

「で？・・・」

「で？って何がだよ？」

まあ只今対戦ゲームをしているんだが、こいつは弱いくせに強いキヤラを探すのは上手いから嫌だよな・・・

「一夏よ！凄いよ！このターンX凄いよ！！！」

「黙れエセ侍！貴様をガン〇ムなどとは認めないぞ！」

因みにやっているゲームは主オススメの「ガン〇ムエクス〇リームバーサス」。通称「エクバ」なんだがな・・・。

五反田がターンX、俺が〇〇。いや、本当に家庭用になってよか

ったよ。

「てか、話は戻すが女の園の話だよ。良い思いしてるんだろ？」

「・・・してねえよ。どちらかと言うと道連れが欲しいくらいだ。」

まったくである。寮の廊下をあんなに服がパージしていたら目のやり場に困るってモンじゃねえ。

「つつか、鈴が転向してきてくれて良かった。本音を打ち明けられる奴が少なかったからなあ」

「ああ、鈴か。鈴ねえ・・・」

うん？五反田やつどうしたんだ？にやけやがって。気持ち悪いな・・・

「・・・トランザム！！・・・はい勝ち！！！」

「ちよっ！一夏、ライザーで粒子化してからの格闘はねえだろ！」

因みにこのゲームは発売一週間で百万本セールスを記録している。需要は男性全般と適性検査が低かった女性に売れていった。

「やっぱせっちゃん強いわ。さて、次は赤棒でも使うかな？」

「たまには別の機体使えよ！東方不敗使えば？」

「あんな厨機体使えるか！お前はヅダで汚い花火でも上げてろよ？」

この作品の機体をベースに作られたISも少ないながらも有るのだから侮れないよな。

「で、話は戻るが、鈴のことは」

「ちょっと弾！お昼出来たって言ってるんだけど！」

と、ドアを開けたのは五反田の母親、五反田蓮さんだ。

どう考えても年齢と外見が合っていない。本人曰く『二八から歳をとってない』らしい。

「あら、一夏くん来てたの？いらっしやい。」

「お邪魔してます。」

「ああ、ごめん。すぐ下行くわ。」

「わかったわよ、その前に一夏くん、『蘭』に挨拶して行ってね。」

「分かっております。」

「一夏、ゲームは俺が片しておくから、『蘭』に挨拶に行けよ？」

さっきまで楽しそうな笑顔だったのに、いきなり弾の顔は沈んでいる笑顔になった。

「サンキューな。」

俺は弾の部屋を出て、蘭ちゃんの部屋に行った。

蘭ちゃんの部屋はホコリ一つ見当たらない位に片付いていたのだが、家具は机に、本棚、ベッドと

立派な仏壇しかない。

「蘭ちゃんごめんね。入学したら直ぐに報告に来ようと思ってただけど色々忙しくて……」

俺は仏壇の前で正座をし、線香に火を付け、合掌しながら行った。

発病したのはちょうど一年位前だ。蘭ちゃんは急性の心臓病で発病から一ヶ月もせずに死んでしまった。

「多分、今度来れるのも夏休みの頃かと思うけど、そんな時には楽しい土産品や土産話、用意して来るから待っててな」

俺は立ち上がり下の階に行った。

その日ご馳走になった定食は泣けるほど美味かった。

「……やっぱり特格からステ入れて覚醒技の方がダメは入るかな？」

「黙って飯を食え、巖さんに殺されるぞ。」

飯は黙って食えよ！

翌日

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的にミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれね。物は良いけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子がわいわいつ賑やかに談笑していた。みんなが手にカタログを持っている。

「そっいえばおりむーのISスーツってどこのお？見たことないんだよ。」

「あー……特注品だよ。サイズとかを男子に合わせたりしたから原型は無いが、もとはイングリッド社のストレートアームモデルだ。」

実は嘘で、作ってくれたのは、白式の制作者の束さんである。

束さんいわく「核かライザーソード位でしか傷を付けられないよお？」らしい。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知して、操縦者の動きを

ダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。

「俺たちの会話に入ってきた博識先生、山田先生はこれまた、凶器、を張りながらすらすらと説明しながら現れた。」

先生よ、胸を張りながら言わなくても……ほら、クラスの無い組がショボーンしてますたい。

山ちゃん詳しい！、山ピー見直した！等のあだ名が飛びかう。山田先生には今幾つかの愛称があるが、教師、しかも副担をあだ名で呼ぶとは、千冬姉にやったら……やってみるか……

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

皇帝さんがログインしますた。

それまで席を立っていた奴らや、騒ついていた連中が一斉に千冬姉に挨拶をした。

「……あ、昨日出したスーッ着てくれたんだ千冬姉「学校では織斑教諭と呼べ織斑」へヴン……！」

あ、朝から出席簿アタックはキツい事です。

ちくせう、今度家の状況、クラスの千冬姉愚民教の奴等に教えてやるつか・・・ビール缶の山とか下着の山とか・・・まったく、しばらく帰らない内にあんなに貯めやがって。

昨日俺が洗濯し無かったら多分、今週持たなかったぞ。

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISSーツが届くまで学校指定のものを使うので忘れないようにな。」

因みに忘れたら水着（スク水、ここ重要！）もしくは下着になるらしい。

まったくこの学園は男の俺には優しくない。もしも授業中なのに下着姿の同級生が居たらと思うと・・・どうしよう。

想像だと、見た瞬間セシリアに射撃されて、箒に大根切りを食らい、鈴に刀でウニにされた後、言い出しっぺの千冬姉に地べたと変わりなくされるビジョンがうかんでくるぞ・・・やべ、冷や汗止まねえ！

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

山田先生、そんなに慌てなくても誰も怒りませんで。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「え・・・・・・・・」

「「えええええっ！？」「」」

転校生が来るとクラスが騒ぐのは古今東西、小中高どこでも変わらないように、只今うちのクラスは騒いだ。

（けどおかしいな、二名転校生がいるなら普通は分けるはず、しかもこのクラスに・・・・なんか裏有りか？千冬姉じゃないと手に負えない輩か俺目当ての企業の差し金か・・・・）

ガラガラ

そう思考していたら教室のドアが開いた。

「失礼します」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クラスに入ってきた二名を見てみんながみんな目を開いた。

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。この国では不慣れなことも多いかと思いますがみなさんよろしく願いします」

正直俺も驚いた、なんだってその内の一人が、男子だったんだから。

ドキッ？男子二人（？）だらけの女子校目録！ 一夏・・・それは僕も含む

五反田め、一夏に厨機体のマスターなんて勧めやがって、死ぬき満々じゃねえか。

この前地元のゲーセンに行ったら中佐のマスターが13連勝していたのだが。おー怖い怖い！！

どうしようかなあ、千冬姉のIS、『スサノオ』にしようかなあ？

千冬姉が仮面付けながら「私には免許が有るといった！！」とか「私の無理で・・・こじ開ける！！」とか！・・・有りだな〃〃〃

そろそろ機体説明しないと・・・作者が死ぬ・・・てな訳で機体説明しま

電車の中とは暇なものだ。どうも、試験で早くかえられるからウハウハしてるマイペースです。

え？世界史？数学？知らない知らない（．．）ノシ

今からゲーセン行ってきます!!!!!!

そろそろ機体説明しないと・・・作者が死ぬ・・・てな訳で機体説明しま

白式

本当は某企業が作る筈だったが束がその企業に武力介入をし、コアを奪い、千冬のもと愛機・暮桜のコアとミックスして容量が二倍になったチート機体。

能力は、右手に触れたもののエネルギーを奪い自分のエネルギーに変換する。

だが、能力が能力な為に半分以上の容量を食ってしまう。

因みに後付けの装備は付けられない。その代わり一夏の幅広いネタ技と一夏自体のスペックによって武装がなくても専用機持ち程度なら倒せる。

ワンオフアビリティは『風林火山』。これも容量の半分をしめている。つまり、『右手の能力』と『風林火山』に容量を食われている訳だ。

今現在出ているのは火の『紅赤朱』。これは機体に高熱を帯びさせる単純な能力。

ただ、温度は『摂氏2000』であり、触れたら機体はおろか、相手の人体にも影響がある。

おまけに機体の色が白から赤色に変色する。

他の能力は後々シナリオでお楽しみください。

甲龍

はい、原作無視です。原作レイプです。後悔はしている、だが反省はしない。

原作の連結刀と衝撃砲は無くなり、某慢心王のような戦い方である。登録されているなら古今東西どんな武器でも出てくる。つまり、登録すればセシリアの『スターライトmk』でも出せる。

だけど通常は普通の刀や機関銃等を出している。どうしてかと言うと、鈴の使用する『暗器方』で使用するものの方が使いやすいからである。

刀剣の一つ一つが所謂データの塊であり、使うたびに甲龍の容量が軽くなっていき、最終的には神速の域に達する。なんだかめだかボ

ツクスの宗像くん見たいですね。

ワンオフアビリティーはまだ出てないが一応は出せる。

そんな受験じゃないんだからパンパン叩かれないよな

ー夏?アノト

リハビリに取り敢えず一話投稿します。

長らくブランクがあった事をお詫び申し上げます。

そんな受験じゃないんだからパンパン叩かれないよな

—夏？アント

「お、男・・・・・・・・・・？」

誰かが呟いた。皆が肩をわなわなさせている。・・・・・・・・さて、耳を塞ぐ準備を・・・・・・・・

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
」

まるつきり童顔。髪は遊んだのとは違い純粋な金髪。体は華奢に見える。

・・・・・・・・これだけ見ると・・・・・・・・全国の男どもは祭り上げるだろうな。

「きゃ・・・・・・・・・・」

「はい？」

「きゃあああああ
！」

やっぱりかああああ！！

くそっ！耳をふさいでるつてのに鼓膜に響きやがる。こいつら全員波紋でも使えるんじゃないかねえのか！！！！

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！童顔！シヨタ系！」

「私を産んでくれてありがとうお母さん！」

皆が皆（一部をのぞく）コロンビア・・・もとい歓声や天に拝んでいたり・・・ヤバイ、このクラスこわい。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬姉が頭をポリポリ掻きながら言った。まあ、千冬姉は余りこういうの好きじゃないからな。学生の時も普通の女子とからまなかったからな。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから！」

山田先生が困った顔をしながら頬をぶくつと膨らませるといふ、高等テクを披露しながら皆に注意した。

まったく、本当に山田先生はどこまで俺たち男のツボを刺激するん

ですか!!

……まあ、先生の言う通り転校生は、一人では無かった。

輝くような銀髪。ともすれば白にちかいそれを、腰近くまで長くおろしている。きれいではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしという印象のそれ。そして左目にご注目。

眼帯であります。

しかも白の医療用の奴ではなく、蛇ボスが付けているような黒眼帯。

(……あいや、ありや軍人だな。)

見るからに軍人であるだろう。教室に入ってくるときの足の歩幅、そして無音の足音。多分、相当の訓練積んでるだろう。

「……………」

……千冬姉の事を穴があかんとばかりに見つめている。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「……おいおい、千冬姉を教官って言うことは……こいつ、ドイツか……」

千冬姉はとある理由で一年程ドイツで軍隊教官として働いていたことがある。

俺も知ったのは学園に入学してからだけだな……

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

うーん？見るからにラウラは千冬姉の事に訓練をされたのかな？ラウラの眼差しから見える光は千冬姉を尊敬、または崇拝等の目で見てゐるからな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

おいおい、その自己紹介は面接で『特にありません』って答える位にやっちゃいけない事だぞ!!

「あ、あの、以上……ですか？」

山田先生がラウラに聞く。 流石山田先生だ。出来る限りの笑顔で聞いているが、ラウラの雰囲気にもまれて額から漫画みたいな汗、出てますよ？

「以上だ」

あああ、言わんこつちゃ無いよ？山田先生の涙腺が今にも決壊しそうだよ。

そんなで、俺がラウラを見ていたら、視線が逢った。

「!貴様が!!!!」

こつちにずかずかと歩んでくるラウラ。

目にはなんだか怒りが見えるけど、俺、なんかしたっけな？

そしてラウラとの距離が30センチ程になったら、ラウラは右手を

振りかぶっていた。

ああ、平手打ちが飛んでくるのか……。

そう『理解』出来れば後は簡単だ。

迫ってくる右手を左手で受けとめ、ポケットに入ってたココアシガ
ーレットを右手で取り出し、それを指で弾く。

パスンッ！

「……………」

ラウラは驚いていた。当たり前だ。何故なら
ココアシガ
ーレットは眼帯を、眼帯の紐を打ち抜いていた。

つまり今は左目には何も付けていないことになっているのだが……
。。

「成る程、『境界の瞳』か……。まさか本当にいやがったのか……
」

俺のセリフにラウラは驚いているのだが、右手を振りほどき左手で

目を隠し――

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか!」
言うことだけ言っておいてラウラは空いてる席に座ると、ポケットの中から新しい眼帯を出して付けなおしていた。

「あー・・・ゴホンゴホン!ではHRを終わる。各人はすぐにきがえて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散!」

野原ひろしみたいな父親を持ちたい一夏です 子供に生きろって言うからだ

こんにちはマイペースです。(。・。・。)

最近、一番くじにとあるが参加したので引いてきたのですが、自分が当たったのがC賞のクッション。

友達に自慢しようとしたら友達からメールが。

『一番くじ、A賞の目録当たった(ドヤアアア)』

・・・久しぶりに友達を殺したくなりましたね。

P S、書き方かえてみました。状況や心理描写少なめの台詞多めに作ってみました。

P S (プレイステーションじゃ無いからな?)

ネギまのSS書いてみました。お暇でしたら読んでみてください。弟との合作なので自信は・・・。

「あれ？一夏は着替えないの？」

「ああ、着替えないよ。てか着替えられないだろうよ、女子が居るのによ。」

「!!!!・・・ど、何処にお、女の子が居るの一夏・・・」

シャルルよ、冷や汗がダラダラだし、目まで泳いでいるぞ？

「残念ながら俺の目の前に居るぞ？」

「・・・一夏はいつ気がついたの・・・」

「最初は体つきかな？シャルルの体つきは男性のそれじゃなくて、女子のそれに近いし。それに指とかも細さが女子並に細いしな？」

「・・・あ、あはは。凄いな一夏は・・・そんな事ならグローブとか着ければ良かったかな？」

ひきつった笑顔を浮かべながらシャルルは言っている。

その笑顔は何処かしら何かの束縛から解放されたような表情を浮か

べていた。

「なんで女の子のシャルルが男装なんかしてまで……って、まあ予想は出来てるけどな。……俺の事を調べてこいって言われたんだろ？」

「ははっ。一夏はなんでも知ってるね？……そうだよ。命令されたんだ。父に……一夏の情報を取ってこいって……」

「確かシャルルの父さんって言うてデュノア社の社長だろ？」

「そう。その人から直接の命令なんだ。」

「けどよ、そんな命令なんか断れば良かったじゃねえか？なんで子供のシャルルに」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

「……………」

俺は静かに。そう静かに拳を握りしめた。力が強すぎて血が出てき

ているが俺は無視をした。

「引き取られたのが二年前かな？ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々検査をする過程でI
s 適応が高いことがわかって、非公式ではあったけど、デュノア社のテストパイロットをやることになったも「もういい、泣きながら言うのなら、言わなくていい」！！！」

俺はシャルルを抱き締めた。そう、シャルルは泣きながらも言ってくれたのだ。だが、それでも健気に自分の言いたくない事を言ってくれたのだ。

「大丈夫だ。デュノア社の事なら俺も知ってる。経営難になっ
ても。政府から資金提供が亡くなりそうなのも・・・」

「・・・よく、しってるね・・・」

「だからのお前というマスコットで売りに来たのも・・・」

「・・・ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありが
とうー夏。」

シャルルは俺から離れて頭をさげた。さっきまで泣いていたのでや
っぱり目元は腫れていて、目が充血していた。

「で、シャルルはこれからどうするんだ？」

「そうだね、一夏にはれちゃったし、きっと僕は本国に強制送還されて牢屋入りか、他の企業に入れられるか・・・まあ、僕にはどうでもいいかな。」

「・・・シャルル。」

「何？一夏」

「自由になりくないか？」

「あはは。僕には最初から自由なんて無いんだよ。」

「だったら俺が自由を作ってやるよ。」

そう言い俺は着替えずにアリーナに入っていた。

「むっ。こら織斑！遅刻だぞ！しかもスーツを着てこないなんて一体どういう見だ！」

アリーナに出ると千冬姉に見つかった。

だが俺は千冬姉を無視し、Isを展開させた。

「！……！い、一夏ようしたのだ！？」

千冬姉よ、一夏って言っちゃ不味いだろ？

「千冬姉、夕方くらいになったら帰るから」

「ど、何処に行ってくると言っただ！」

「なあに、ちよっくらフランスに行ってくるだけだよ。」

そっつい、俺はブースターを噴かしながら。

「ワンオフ・アビリティー！」風『疾風迅雷』

ワンオフ・アビリティーを発動すると俺のIs、『白式』は薄い翠

色になり、白い、天使のような翼が生えてきた。

因みに『疾風迅雷』の能力はごく簡単なモノである。

ティウン。

俺はその場から音速を超し、『光速』で姿を消した。

行く先はフランス。デュノア社。

な、何者だ貴様はっ！ はっ！ テメエの娘のダチ公だよバカ野郎

（前書

．．．．．（．．．．．）

ま、まさかこんなことになるとは（．．．．．）

寝不足とはいえ、こんな出来になってしまったことを「公開」はする。
「後悔」はしない。

感想やら提案、はたまたネタワザ等を募集中でござす。

どんどんくれでござす〓^．．．^〓。

な、何者だ貴様はっ！ はっ！ テメエの娘のダチ公だよバカ野郎

一夏SIDE

翔ぶ事20秒でフランス。しかも目の前にはデカイビル「デュノア社」とデカデカと書いてあるビルの前に来ている。

って、着いたのは良いのだが……

『その未確認IS！直ちに制止し、投降しなさい。』

どうやらこのデュノア社の警備ISに囲まれているらしい。

てか！ざっと見ただけでも50機は有ったぞ！？どんだけ警備態勢順調なんだよ！？

「え、ええつと、皆さん？俺はこの社長さんに用があるんですけど……」

「はっ？何言ってるんだ貴様は？貴様のような怪しいものを社長に合わせる訳にはいかな！」

「あら？やつぱり？」

警告 敵ISにロックされています。・・・・・・50機程から

ISからのアラートにびつくりする暇なくいきなり囲んでいるIS
全機からのマシンガンの雨。

因みに相手さんが使っているISはデュノア社が量産している『ラ
ファール・リヴァイヴ』である。

「ほい。はつと。よっころしょ。」

俺はその弾幕を いとも簡単に避ける。避ける。避ける。避ける。
避ける。避ける。避ける。避ける。

「くっ！くそお！何故当たらないのだ！」

いや、何故と言われましても。実際まだ『疾風迅雷』を発動してい
る状態だから避けるのに苦は無い。てか、実際手加減、いや足加減

をしているから速さはまだ動体視力に映る程度で止めている。

本気を出したら視認はもちろん、ISのハイパーセンサーすら出来なくなってしまう。

「次はこっちから行かせてもらっぞ!」

俺がやる事は 殴る。

しかしただの殴りと侮ることなかれ!

『疾風迅雷』の速度で殴られたISがどうなるか……。

3分後

「く、クソオ……」

「50人も精鋭をたった一人で……」

「てか速すぎよ……」

目の前には鉄の山が出来ていた。

勿論全員パイロットは生きてますよ?俺は悪くない人は殺さない主義者なんで。

「では、社長室にむかいますか・・・社長室は多分最上階かな？」

俺はISを使ってビルの最上階に突撃した。

社長SIDE

国連からの連絡で未確認のISがこの国、しかもウチの会社に向かっているという聞き、警備網を張り巡らせてみたら見事に掛かってくれたよ。

しかも連絡によればそのパイロットは世に名を広めている男性パイロットだ。

何故この会社に来たかは解らないがこれもまた不幸中の幸い！！！！

俺は今会議室から自分の社長室に向かいながら。微笑みを隠せずに笑いながらスタスタと社長室にむかっている。

「ハッハッハッ！どうかして彼を我が社に取り入れればフランスー！いや、世界一のIS制作の会社にだって出来る！転機は私に向いてきたと言うわけかああー！！」

俺は心の中の声を隠せずに大声を出しながら言っている。

そして社長室に着いた。

ここにある書類に彼のサインさえ書かせれば私は・・・私は世界一になれるんだあ！

ギイ

ドアを開けるとそこには

「Welcome? バカ野郎。」

窓ガラスは割れ、書類は散乱して見るも無惨な社長室に、秘書に四つんばいをさせて、その上に足を組ながら座って微笑みを浮かべている

悪魔がいた

一夏SIDE

「いやいや、社長さん。遅いですよ？遅すぎて貴方の秘書さん。調教しちゃいましたよ？」

この部屋に窓ガラスから「ダイナミックお邪魔します」を決め込んだ時に、この部屋には秘書があり、非常ボタンを押されそうになったから少しばかり『調教』をしていたらやっとクソオヤジが来ましたよ。

「き、貴様は！誰なんだ！？」

「俺は貴方の息子、いや娘さんでしたね？そのクラスメイトです。」

「む、娘だと！？……まさかあのクソ娘めっ、あんなに言い付

けたのにバレやがったな・チツ、使えねえ女だ。」

・・・ほおう・・・

「テメエ、自分の娘にクソ娘は無いだろ？ 仮にも自分の娘だろ？」

「カツ！ あんなの身体だけの関係のヤツが勝手に孕んで、勝手に産みやがったんだ。ケツ、せつかくだから使ってやろうと思ったのに入学早々にバレやがって・・・」

「・・・シャルルをどうするつもりだ？」

俺はこの塵芥の聞くに耐えない台詞を耐える為に本日二度目の拳を握りしめている為の出血をしている。

「あ？ そうだなあ、とりあえず強制送還はするだろ。・・・そうだな、アイツは顔は良いからな。俺の〴〵性玩具にでもしてやるよ。アイツは俺の言うことは何でも聞いてくれるからなあ！」

〴〵これ〴〵は人間の三大欲求の一つ、〴〵性欲〴〵を彷彿させるような「下衆」のような顔をしながらいいやがった・・・

駄目だ……限界だ……

「そんなことより君にいい話があるんだが？我が社に入らないかい？君に利しくない話なんだg『ボギンツ』ボギン……つてええええ！？」

目の前の“コレ”はどうやら身体からあり得ない音がして驚いているのだろう。

まあ、音の発生源は“コレ”の両腕の付け根からである。

俺が近付いてきた“コレ”の両腕の付け根を音速で殴りぬき骨を『粉碎骨折』をさせたのだから。

「……もう喋るな……お前の台詞にはもう“家族”を名乗る資格はねえよ。お前は子供を犯すと言ったな？本当の親なら子供をベットの上げじゃなくて、アットホームな感じで抱くんだよ……」

「く、クソガキがあああ！知ったような口を聞きやがって！……！」

まだ喋るかよ……

「お前の喋る権利を、剥奪する」

カコッソ

「ッ！！！」

どうやら喋りたいようだが、しゃべれないようだ。

それもそのはずだろ。何故かと言うと俺がやったことは音速で「顎」を殴り抜いた。そしてその微調整で脳の神経を刺激し、会話をする神経を『刺激』した。

ピッポッパ！

「……あ？今大丈夫ですか？ちよつとそっちの研究所に被^モ検体が一人譲れそうんだけど……うん、じゃあ料金はいつもの所に入れておいてね。じゃあまた今度。」

俺は知り合いの『科学者』に連絡をし、この「ガラクタ」をモルモットにしてもらう予定になった。

因みに料金は諭吉〇〇〇枚に相当である。

「ではでは、デュノア社長。自分はこれにて失礼させてもらうよ。
多分『アイツ』は仕事が速いから多分2分くらいでやってくると思
うよ。」

俺はISを起動させ、『疾風迅雷』を発動させる。

「あ。一つ言っておくよ。『アイツ』に『実験』^{いじられ}たら、死より恐ろ
しいらしいよ？まあ、頑張って生き延びろよ？」

「
ッ！！！！！」

「ごめんね？おれ、ナメック語は解らないんだ？」

そういつて俺は、デュノア社を、フランスを出た。

その夜には『デュノア社長謎の失踪！？』なんつうニュースが世界
を巡った。

さあ選べ！妹か囚人か！はたまた妹か妹か妹か妹か妹か！　一夏が・・・

み、みじかい（へ　；）

まあ、予定的にもこんぐらいの予定だったし良いかなあ？

まあ、これからの設定的に問題は有りそうだがそんなの知ったこと
かつ！

感想やら提案、はたまたネタワザ等を募集中でござす。

さあ選べ！妹か囚人か！はたまた妹か妹か妹か妹か！　一夏が・・・

一夏SIDE

あれから20秒でフランスからIS学園に着いたのだが・・・

「これはこれは授業放棄とはいいいご身分だなあ？織斑？」

校門の目の前に居たのは千冬姉の仮面を被った修羅であつた。

「ち、千冬姉え！？コレには理由があつてだね！」

「ほお？貴様には私の有難い授業を抜け出してまで遣らなくちゃ行けないことがあつたというのだな？」

あゝやや・・・笑顔だよ千冬姉・・・死にたくなるような笑顔だよ。

多分これ、怒ってるよ千冬姉・・・。だが！

俺にはお土産が有るんだ！

「と、ところでち、千冬姉？」

「なんだ愚弟よ、懺悔ならさせんぞ。貴様にはアリーナを300周させるつもりだが？」

「それ死んじゃうでしょ！？違う違うよ！？」

俺はポケットから、ある、書類を取り出して、千冬姉に突き付けてこう言い放った。

「ねえ？千冬姉。妹欲しくない？」

「・・・・・・・・・・ピッポッパ！・・・・ああ私だ。公安零課か？今私の目の前に変態がいる。すぐに来てくれないか？」

「ちょっと千冬姉っ！？公安零課に連絡って、本当に殺す気じゃないの！？とにかくケータイ閉まって！」

俺は千冬姉からケータイをかすめて閉じると、首には150センチは有りそうな刀が当てられていた。

「では、聞かせてもらっぞ？貴様は何故そんな事を聞いたのだ？」

凄いや千冬姉・・・背中から怒気でスタンド見たいなものが見えるよ・・・

「わ、わかったから。説明するから早く刀退けてよ！？」

そしてある意味強迫気味だった俺は、シャルルの事を、そしてあの社長の事を話した。

「なるほど、貴様らしい判断だな。だが『^{モルモット}実験』を送った先が『アイツ』なんだろう？それはいいのか？お前は『アイツ』と関わりたくないだったんじゃないのか？」

「・・・まあね、だけど『アイツ』は一応、『^{モルモット}籌』の親族だしね？それにシャルルには新しいISを使ってもらっつもりだから、『モルモット』はそれのお礼だよ。まあ、金は貰ってるけどね。」

「・・・ふん。貴様はかわらないな・・・よし！織斑家の家主としては認めよう。だが、それはちゃんとデュノアに聞いてからだ。」

・ちゃんと説得しろよ。」

「ああ、千冬姉、ありがとう。」

そういうと俺は教室に向かって走りだした。

走ること約5分後

現在の時刻は昼休みのため廊下にはちらほら生徒がいて、色々と鬼ごっこがあつたが、やっとこさ教室に着いた。

ガラララッ！

ドアを開けるとニメートル先にある机にシャルルがいた。

「シャルル！話があるんだ！早く来てくれ。」

「えっ？い、一夏・・・な、何かなあ？つてえええええ！？」

俺がスタスタとシャルルに近寄り腕を掴み、教室の外に出た。

そして早足で1分ほど移動し、現在地は屋上。

「ハアハアハア・・・い、一夏あ・・・い、いきなりどうしたんだい？」

シャルルは早歩きで屋上に向かったため息を整えている。

「シャルル。お前の親父さんにさっきまで会ってきた。」

俺はさっきまでのフランスでの出来事をシャルルに話した。

「・・・は、ハッハッ。父さんはやっぱり僕の事を道具としてしか見てなかったんだね・・・」

最初はやっぱり頭に入らなかったが、徐々に整理が出来つつあるシャルルは理解してきて、苦笑を羽かべている。

「すまん。勝手に真似だとは解ってはいるが、俺はどうやら口より先に手が出るタイプなんだな。」

「ううん、一夏は悪くないよ。むしろ感謝したいよ。僕を束縛から解放してくれたんだから・・・。けど、これからどうしようかな？帰る所が無くなっちゃったよ・・・」

シャルルは笑いながら言った。

「・・・そこでシャルルに提案があるんだけど・・・」

「ん？何？一夏？」

「お前はそのままフランスに戻ったら、多分『性別を偽った罪』で刑務所に入れられるかもしれない・・・」

「・・・うん。大丈夫だよ一夏。そんぐらいだったら覚悟は出来るから。」

「そこでシャルルには提案があるん。」

俺はポケットから書類を取り出して、シャルルに突き付けてこう言い放った。

「シャルル。俺の妹になれ。」

俺って言ったじゃん。妹が欲しいって・・・最高です・・・
どうも、転校

とりあえず謝らせて下さい。すみませんでした。

前々回の警備ISの件で「50機」は多いだろ。とご指摘を貰いました。自分的には一夏の『疾風迅雷』を際立たせる為の演出なのですが、皆様が不愉快に思われていらっしゃるのなら修正を加えたと思います。

こんな駄文まみれの作品ですが、楽しんでいただけののなら本望です。

では、短いですがお楽しみください。

俺って言ったじゃん。妹が欲しいって・・・最高です・・・
どうも、転校

「・・・一つ聞いていい、一夏。」

「なんだシャルル？」

俺の「妹になれ」宣言から早20秒。最初は顔が百面相していたシャルルだったが、どうやら頭が整理を完了したようだ。

「僕が一夏に会ったのって今日が初めてだよね？」

「そうだな。今日の、朝のホームルームで会ったのが初めてだな。」

「そんな初めて会ったばかりの他人になんで一夏はそこまでやってくれたの？」

シャルルSIDE

僕がそう、`当たり前`の事を聞くと、一夏はごく普通に、`当たり前前`の様に。

「他人を助けるのに理由や意味、関係が必要なのか？」

「……は、ハハツ、それはね一夏。皆が思ってる事だよ一夏。ただどね、皆が出来ない事なんだよ。」

「それにシャルルの話なんか聞いちまったら身体が勝手に動いちまっつてな。女の子を泣かせたのに動かないのは他人やら初対面以前に人間じゃ無いんだよ。」

「まあ、詰まる話。家族に成っちまえよシャルル。俺たち家族はシャルルを歓迎するぞ。」

一夏が家族に見せるような笑顔を僕に向けてきた。

ズルいよ一夏。そんな顔をされて断ったら僕も人間じゃ無くなるじゃないか。

「ほ、本当にいいの僕が家族になっても……僕みたいな愛人の娘でも、一夏や織斑先生の事を家族だと思っても……」

どうやら僕は泣いてる様だ。初めて母さん以外に家族だと扱われたのが、嬉しいんだ。

「シャルル。これだけは覚えておけよ。シャルルが、愛人の娘、だろウト、デュノア社の娘、だろウト、それはただの、添え物、なんだよ。俺はシャルルは、シャルル、しか見てないんだよ。」

一夏僕の肩を掴んで真面目な顔をしながら、真剣な声色で言ってきた。

「解らないんだったら何べんでも言ってやるよシャルル。」シャルル、俺の家族になりやがれ。」

さっきの真剣な顔が一瞬で崩れさり一夏の顔は笑顔一色になった。

ああ、駄目だよ一夏。そんな顔されたら

「……うん。ありがとう一夏……うつん、一兄^にい……」

兄妹なのに好きに、愛しなくなっちゃったじゃん……。

一夏SIDE

その後にシャルルが泣き止むまでまち、俺たちは取り敢えず職員室に向かった。

職員室に向うときにシャルルが腕に抱きついてきたのだが・・・はは、シャルルはどうももう、兄妹愛に目覚めたんだな。

そして職員室に着き、千冬姉に報告をすると。

「そうか、デユノアよ・・・いや、シャルル。これからは姉妹として何でも頼ってくれ。」

「はい。千冬お姉ちゃん」

ブシャヤヤア！！

鼻血に溺れている千冬姉がいた。

翌日、朝のホームルームにシャルロット（昨日実名を教えてもらった）は居なかった。

先ほど食堂で「先に行つてて」つと行って、どこかに行つてしまつた。

まったく、我が妹は何処に言つてしまったのだろうか。

あれから妹萌えに走り続けている千冬姉が怖くなるのはまた後の話である。

「え、ええ、み、皆さん。おはようございます。教室にやつれた？ 感じの山田先生が入ってきた。」

「・・・え、ええーと、皆さんに報告があります・・・転校生が来ました。」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

皆が「え？」って顔をしている。そりやそうだ2日連続に、同じク
ラスに転校生が来るんだから。

また、ボーデヴィツヒと同じ訳有りか？

皆も頭が着いてきたのか騒ぎ始めている。

「では、入ってきて下さい」

「失礼します。」

ドアを開けて返事したのは、朝食堂で別れた。昨日俺の目の前で泣いた。昨日家族になった。

「織斑おりむらシャルロットです。皆さん。改めてよろしくお願いします。」

ミニス力を履いてペコリと頭を下げて挨拶してるのは、我が織斑家の妹、シャルロットだった。

「ええーと、どうやらデユノア・・・織斑くんは実は織斑さんだっ
たって事なんです。はあ、また部屋割り決めないと、いや！シャル
ロットちゃんと織斑くんは家族なんだから同じ部屋でも良いよね！」

どうやら山田先生がやつれたのは、部屋割り`を考えるのが嫌だっ
たからなのだろう。

「そつだ。僕から皆に言うことがあります。」

そついうとシャルロットは教卓の方からこちらに向かってくる。

そして俺の座席の前で立ち止まると。

「僕から家族を、一夏を盗ったら駄目だからね。だからここでマ
ーキングさせてもらつよ。」

そついうとシャルロットは俺の両頬を両手で包み込み

「愛していくよ一兄い・・・チュ・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9822s/>

IS インフィニット・ストラトスー武装を持たないISと気に入らない目付きー

2011年8月19日07時06分発行